

# 東方Elona録

ネエリ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ここはどこだ？すくつに居たはずなのだが…

ここはノースティリスではないのか？

初投稿です。

私の好きなフリーゲームのelonaと東方Projectのクロスオーバーです。  
駄文ですが、よろしければ読んでみてください。  
たまにシリアルズ、ギャグ多め。

オリジナルの異変は閑話として投稿します。

評価・コメントお待ちしております

目次

ネフイア <<紅魔館>> ver3

50

ネフィア <<紅魔館>> ver4

ネフィニア 妖怪の山

ネフィア <<妖怪の山>> 紫 S i d

e | 13

博麗神社  
【乞食もたまには許してあげ

よつー】

マヨヒガ  
<<妹  
猫”  
の館>>

25

マヨヒガ  
〔初の弾幕、ごつこ〕

2 漢書

8

水滸傳  
第六回  
異夢解說

45

春雪異変	<<☆祝福された“こたつ”	94	88
春雪異変	<<固定A F : だと : >>	99	
春雪異変	<<廃人 v s 西行妖>>	108	
春雪異変	<<異変解決>>	115	
日常	<<スペルカード万能説>>	122	
宴会	[弟子ができましたver1.0]	129	
修行	[弟子ができましたver2.0]	177	
閑話	<<★第1巻目の妖夢の紅炎異変日記>>	147	135
閑話	<<★第2巻目の妖夢の紅炎異変日記>>	154	
閑話	<<★第3巻目の妖夢の紅炎異変日記>>	165	

閑話 ◹ ◉ ★ 第4巻目の妖夢の紅炎異変  
日記>>

---

181

# 目覚めた場所は？

あなたは目を覚ます。

どうやら少し気を失つっていたようだ。

「……？」

目を覚ましたあなたは迎えたのは、自然の豊かな香りと心地よい風だ。辺りを見回してみるが、神話生物やドラゴンの姿はなくとても静かだ。

ここは、どこだろう？

“私”の知るノースティリスにこんな場所があつただろうか？

取り敢えず、立ち止まつているわけにもいかないし辺りを散策してみるか。

\* \* \* \* \*

数分後、あなたが辺りを散策していると目の前の空間が裂けた。比喩ではなく、言葉通りの意味だ。

1 目覚めた場所は？

これは、…ムーンゲート?

あれ、ムーンゲートに大量の目なんて付いていたかな?

ん、誰か出てくるみたい。一応、すぐに殺れる用に構えておかないと…。  
「こんにちは」

「こんにちは」

ふむ、勝てない相手ではない…か?

私と同レベルの相手とは久しぶりだなあ…。

「あなたは一体どこから来たのかしら?」

「ノースティリス」

まあ、嘘をつく必要もないだろう。

「…まあいいわ。あなたは何をしに来たのかしら?」

いや、気がついたら居たんですが。

「分からん。気がついたらここに居た」

「…そう。私は八雲紫よ。あなたは?」

「ユキ」

「ユキ、私はこの世界が大好きよ。私が創った世界を壊されたくはないの。  
だから、問題を起こさないでもらえるかしら?」

### 3 目覚めた場所は?

ふむ、問題か。どこまでが問題に含まれるだろうか？

核か？終末か？まあ、どちらも此処では使うつもりはないのだけれど。

「分かった。代わりと言つてはなんだが、この世界について説明してくれないかな？」

私はこの世界のことについて何も知らないくてね」

「分かったわ」

\*\*\*\*\*

なるほど、この世界は幻想郷というのか。  
やはりノースティリスではなかつたかあ。

それと、どうやら私クラスの生物はほとんど存在しないらしい。  
よく滅びなかつたものだね……。

にしても、スペルカードルールか。面白い事を考えるものだ。

☆<<スペルカード>>

まさか、神器クラスの物を貰えるとは。しかも固定ではないということは、他にもたくさんあるのだろうか？

「なるほど、大体わかつた。それじゃあ、私はこの世界を回つて見るよ。

前の世界とは違つて、ここはとても綺麗だからね」

「気に入つて貰えたみたいで何よりだわ。

それでは、あなたの旅路に幸運があらんことを」

「ふふつ、『幸運』ね。

私には工へちゃんが付いてるからね。幸運には自信があるよ」  
うみみやあ！

紫 side

あ、危なかつたわ。まさか、あそこまで力を持つた“人”が居るなんて。  
話してただけで圧迫感がすごかつたわ。

ま、まあ問題を起こさないつて約束してくれたし大丈夫よね？

それにもしても、やけにスペルカードを見て喜んでいたけれどそんなに嬉しかつたのか  
しら？

マヨヒガに戻れば山ほどあるのに：

取り敢えず、天魔と地底の覚り妖怪に説明だけしておきましょ。

特に天魔には急いで伝えないと、妖怪の山が悲惨なことになりますわ。

5 目覚めた場所は?

はあ…、  
今日は忙しくなりそうですね。

# ネフイア ＜＜妖怪の山＞＞

取り敢えずわかつたことだが、どうやらこの世界でも魔法と技能は使えるようだ。試しに“英雄”の魔法を使ってみたがいつもどおり発動した。それならば帰れるのではと思い“帰還”的魔法を使ってみたが、どこにも飛ぶことができなかつた。

どうやら帰ることはできないようだ。まあ、戻つたところですくつ巡りぐらいしかやることもないし別にいいか。

この世界なら未知のアーティファクトも手に入りそうだからね。

…そうだ、“願い”はできるのだろうか？

…なんと、願いは使えるのか。それじゃあ工へちゃん呼んでみようかな。  
いでよ！工へカトル…ちゃん（ボソツ）

うみみやあ！女神さまを呼ぼうとするのは誰かな？誰かな？

どうやらこの世界には呼べないみたいだ。嘘でしょ、私の楽しみの一つが…。  
代わりになぜかサームンが降つてきた。

どうやら工へちゃんからのプレゼントのようだ。

大切にクーラーボックスに永久保存しておこう。  
さてと、色々分かつたしこの世界を見てまわろうかな。暇つぶしぐらいにはなるとい  
いなあ。

\*\*\*\*\*

「止まれ！ここは天狗の治める妖怪の山よ！今すぐ立ち去りない！」

ふむ、この世界を見て回りたいからこの山にも登りたいんだけどなあ。

「ごめんね。私も色々とこの世界を見て回りたいから、登りたいんだよね。  
だから登らせてもらうよ？あと、相手との戦力差も分からぬのに喧嘩売らないほう  
がいいよ？」

殺されるから」

目隠しして座つても勝てる。

それが目の前の白犬の評価だ。

……もしかして、この世界ではこの程度が普通なのだろうか？

「人間風情が我ら白狼天狗を舐めるな！」

おつと、どうやら白犬の機嫌を損ねてしまつたらしい。

私は忠告しただけなのに斬りかかつて来ちやつたよ。

けど…、うん。当たらないと思うよ？

「なつ…、私の攻撃が躱されるなんて」

いや、かなり遅かつたよ？まだパルミアのガードの方が速いよ？

「貴様、一体何者だ!!」

「私？通りすがりの『妹』だけど？あとさ、そろそろめんどくさくなつてきたからさいい加減攻撃やめてくれないかな？じやないと、この山滅ぼすよ？」

少しばかり威圧してみたけど、攻撃やめてくれないかなあー。

当たらない攻撃をちまちまと何回もやられるつてムカつくよね？

さて、どうやって滅ぼそうかな。核と終末は紫ちゃんに止められちやつたから他の方法で…、

ああ、あの魔法があるじやん。

「…ツ?! 総員かかれ!!」

どうやら、白犬は他にも複数いたらしい。まあ、気づいていたけどね。よし、滅ぼすか。山ひとつぐらいなら紫ちゃんも許してくれるよね。

“メテオ”

elona民なら誰しも知っているだろう”自分を含めた”全域攻撃魔法。そう、メテオは自分すらも巻き込むというネタ魔法なのだ。

しかし、ネタ魔法だからこそ極めようとする頭のおかしい魔人や魔族居るのだ。

いやー、前にお遊びでパルミアでメテオ祭りやつた時のおかげか、レベルが異常に高いんだよね。

さて、どうなることやら。

……あれおかしいな？いつもどおり隕石は降ってきたのに全部ムーニゲートに吸われたぞ???

あれは、紫ちゃんのムーンゲートだったような。

「ユキ？これはどういうことかしら？」

後ろから呼ばれたので振り返ると、そこには妙に疲れたような紫ちゃんと鴉？が一匹居た。

「て、天魔様！」

ふむ、どうやらこの鴉？は天魔という名前のようだ。

「いやね、警告したんだけどね？目の前の白犬ちゃんが攻撃をやめてくれないから、山を滅ぼそうと思って」

「なんで山を滅ぼそうという発想になるのよ！」

「いや、だつて白犬ちゃんがいっぱい居たからコレにしたんだよ？」

それに、紫ちゃんに世界を壊さないで欲しいって言われたからなるべく被害の少ない広範囲魔法を選んだんだし。

終末や核爆弾なんて使つたら世界が壊れちゃうから……」

「え……、アレ以上に酷いものがあるのかしら？」

「うん。むしろアレはネタ枠の面白魔法だよ？」

「ごほん……すまなかつた。この山の代表者として謝罪する。

ウチの者が迷惑をかけて申し訳ない。どうか許してもらえないだろうか？」

紫ちゃんに魔法の説明をしてたら、天魔ちゃんに謝罪されてしまった。

「天魔様が頭を下げるほどの相手だなんて……」

お、どうやらやつと白犬ちゃんも私の実力がわかつたようだね。

にしても、天魔ちゃんは”負ける気はしない”ねえ。

やつぱりこれぐらいが普通なのかな？

「いいよいよ、別に私も戦いたい訳じやないしね。

私が山に自由に入り出せるようにしてくれたらそれでいいよ」

「承知した。すぐに全ての天狗に伝えよう」「紫ちゃんも『めんね？』さつき見てたけど、私の『メテオ』を無効化したのって紫ちゃんでしょ？」

「え、ええ。そうですわ」

「次からはメテオも使わないようにするよ」

「そうしていただけと、とても助かるわ」

さて、魔法がひとつ使えなくなつてしまつた。まあ、ネタ魔法だからいいけど。

ほかの魔法、何冊あつたかなあ？。ストックはあるけど本も用意しておきたいんだよなあ。

「取り敢えず。今日は落ち着けなさそだから寝るね。おやすみ」

「はい？」

寝よう！疲労も溜まつたし、なんか今通つても色々とめんどくさうだし。幸せのベッド持ち歩いてよかつたあ。重さりつてよくよく考えるとすごいよね。

羽の巻物つてどういう原理なんだろ。

「……取り敢えず、話し合いましょ。白狼天狗と鴉天狗を全員集めてもらえるかしら」

「あ、ああ。山頂に全員集めるとしよう。にしても、コイツは一体何ものなのだ？」

恐ろしい程の力を持つてゐるし、どこからかベッドを取り出して寝てるし色々とおか

しいじやろ」

「…先に山頂に向かってますわ」

紫はそう告げると、とても疲れたような顔つきをしながらスキマへと戻つていった。

# ネフィア <<妖怪の山>> 紫 side

「妖怪の山」

「……と言うわけで、彼女が来たら通してあげてほしいの。

下手に白狼天狗たちを向けると、殺されてしまふかも知れないから」

「そんなにやばい奴なのか？お主が警戒するほどとなると相当だぞ」

「ええ、私とあなたと鬼子母神を合わせても勝てないほどですわ」

「それほどなのか！？……わかつた、白狼天狗たちには下がるよう命じておく」

「そうしていただけだと助かるわ」

ま、間に合つてよかつた。

いくら約束したとはいえ、いきなり襲い掛かられたらあの子でも反撃するでしょう

し。

それに白狼天狗が耐えられるとは思いませんわ。

「天魔様！侵入者です！」

侵入者？こんな忙しい時に、全く誰ですの。

「何？ 誰だ？ 博麗の巫女か？ それとも人里の人間か？」

「い、いえ…、それが金髪の子供なのですが、白狼天狗たちの攻撃を軽々と躲すほどの実力者にして…」

……前言撤回。どうやら間に合わなかつたみたいね…。

なんで真つ先に妖怪の山に来るのよ！おかしいでしょ！他にも見るようなどころいっぱいあるでしょ！

「て、天魔。急いで白狼天狗たちを下げさせて！彼女がさつき言つてた子よ」

「わ、分かつた。すぐに下げさせよう」

「頼むわね」

も、もう少しだけ何もしないで。

すぐに攻撃をやめさせるから、何もしないでよユキ…

「天魔様！大変です、空が！」

今度は何よ！天魔が今すぐ白狼天狗たちを下げさせるから、おとなしくしてなさいよ

！

「空？な、なんじやアレは！」

アレ？アレって一体何よ。今日は普通に天気のいい日でしょ。

……何、アレ？なんか隕石が大量に降つてきてるんだけど…。

いやおかしいでしょ！なんで、博麗大結界があるのに空から隕石が降つてくるのよ！

結界に異変は感じないし、もう何なのよ！

「ああもう！なんで今日はこんなに厄日なのよ！」

取り合えず、スキマに入れて相殺させよう。…うん。

\* \* \* \* \*

「つ、疲れた…」

「た、助かった…。感謝するぞ八雲殿」

もうやだ、冬眠したい…。

「取り合えず、白狼天狗たちを下げる前に彼女に謝りに行くわよ。

じやないと、どれほどの被害が出るかわからないわ…」

「あ、ああ…」

\* \* \* \* \*

「ユキ？これはどういうことかしら？」

…相変わらず、こんな女の子がアレほどの力を持つてるとは思えないわね。

一体どんな世界から来たのかしら。たしかノースティリス？だつたかしら。

そんな地名聞いたこともないのだけれど…。

嘘を言つてる感じでもなかつたわね。

「て、天魔様！」

「いやね、警告したんだけどね？目の前の白犬ちゃんが攻撃をやめてくれないから、山を滅ぼそうと思つて」

「なんで山を滅ぼそうという発想になるのよ！」

いや、いやいやいや、どういう思考回路をしたら山を滅ぼすなんて発想になるのよ…。  
約束と違うじやん！ 壊さないつて約束してくれたじやん！

「いや、だつて白犬ちゃんがいっぱい居たからコレにしたんだよ？」

それに、紫ちゃんに世界を壊さないで欲しいつて言われたからなるべく被害の少ない  
広範囲魔法を選んだんだし。

終末や核爆弾なんて使つたら世界が壊れちゃうから…‥

「え……、アレ以上に酷いものがあるのかしら？」

「うん。むしろアレはネタ枠の面白魔法だよ？」

いや、アレよりもひどいものつてどんなものよ…。

というか今、核爆弾って言つた？き、聞き間違いじゃないわよね？

……なんでそんなもの持つてるのよ！おかしいでしょ！個人で持てる物じやないでしょ！

「（ご）ほん…、すまなかつた。この山の代表者として謝罪する。

ウチの者が迷惑をかけて申し訳ない。どうか許してもらえないだろうか？」

……お願いだから許してあげて？これ以上面倒を起こさないで。お願いだから…。

「天魔様が頭を下げるほどの相手だなんて…」

気づくのが遅いわよ！なんで実力差が分からぬのよ！

私ですら生き残れる自信がないのに、あなたたちが勝てるわけないでしょ！

というか、実力差が分からぬなら喧嘩を売るのやめなさいよ！

哨戒天狗の仕事だつてのはわかるけど、一目で分かるでしょ！

絶対に勝てないつて！何でもつと早く天魔に伝えなかつたのよ！

「いいよいよ、別に私も戦いたい訳じやないしね。

私が山に自由に出入りできるようにしてくれたらそれでいいよ」

な、なんとか許してもらえたみたいね。助かつたわ。

……あとで藍に胃薬を用意させましょ。

「承知した。すぐに全ての天狗に伝えよう」

「紫ちゃんも『めんね？』さつき見てたけど、私の『メテオ』を無効化したのって紫ちゃんでしょ？」

よ、よく私だつてわかつたわね。流石というかなんというか…。

「え、ええ。そうですわ…」

「次からはメテオも使わないようにするよ」

「そうしていただけと、とても助かるわ」

やつた！これでもう、あの隕石は降つてこないのね！

……なんで私こんなことで喜んでるんだろ。

「取り敢えず。今日は落ち着けなさそうだから寝るね。おやすみ」

「はい？」

な、なんかベッドを取り出して寝始めちやつたんだけど…。

というか、今どこから出したのよ。

もうヤダ…、何この規格外…。

「……取り敢えず、話し合いましょ。白狼天狗と鴉天狗を全員集めてもらえるかしら」

「あ、ああ。山頂に全員集めるとしよう。にしても、コイツは一体何ものなのだ？」

恐ろしい程の力を持つていて、どこからかベッドを取り出して寝てるし色々とおか

しいじやろ」

「…先に山頂に向かってますわ」

寝よう。さっさと要件を済ませて私も寝よう。  
はあ…、今日は厄日ですわ…。

# 博麗神社【乞食もたまには許してあげよう!】

「ん…、もう朝か」

昨日はいろいろあつたなあ。紫ちゃんが困っちゃいそうだし、今日は他のところに行こ。

にしても、此処は相変わらずエーテルの匂いがしないし、いい世界だなあ。

取り合えず、翼装備して空から見てみようかな。

：なんだろう、あれ。なんか“神々の休戦地”と同じ雰囲気の場所があるんだけど。  
もしかして神様でもいるのかな？

……!? も、もしかしたら祭壇があるかも！ 工へちゃんにお魚上げないと。

\* \* \* \* \*

さて、着いたはいいけど予想以上にボロボロだなあ。  
あのダルフィでさえ、もうちょいまともだつたよ？

「誰? 参拝客? お賽銭ならあつちよ」

はて、この少女は誰だろうか? (見た目 135 cmのロリ↑)  
こここの管理者か何かかな?

「お賽銭…って何?」

0  
お賽銭って何? 納税見たいなもの? 納税ならちゃんとしないとね! (カルマ —10)

「あんたお賽銭を知らないの? 取り合えず、あそこの箱にお金を入れるのよ」

どうやら入れなければいけないようだ。この世界のガードがどれだけ強いかわから  
ないし入れておこう。

えーっと、手持ちの請求書は……。

25000 gp

……そういえば、ノースティリスについたばかりの頃に拾ったものだけで、後から來  
た請求書は全部放置してたの忘れてた。

ま、まあいいよね。請求書なんてなかつたことにしよう、うん。

んじやあ、25000 gp入れておくかな。

「あ、あんた今一体いくら入れたの!?」

「え、えーっと25000ですけど」

バレた？もしかしてバレた？い、いやだなあ、それが正規の金額ですよお。

「25000!? そ、そんなに入れてくれたの!? ありがとう！これで生活していくわ！」

あー、もしかしてこれ納税箱じやなくて乞食と同列だったのかな？

…まあいいや。たつたこれだけの金で喜んでくれたのなら。

それに……『勝てない相手ではない』ねえ。

また紫ちゃんと同じレベルに強い子かあ。

この子ぐらいの強さの子がいっぱいいたらしいのに。

「上がつていつてよ。お賽銭してくれたしお茶ぐらい出すわよ」

「ん、お邪魔します」

にしても、『神々の休戦地』と同じ感じがしたんだけど、気のせいだつたかな？

「ところで、あなたは？ 私は博麗靈夢。気軽に靈夢でいいわ。お賽銭ありがとうね」

「私はユキ。昨日この世界に来たばかりだから、色々巡つてる最中だよ。  
ところで、此処つて神様とかいない？ 前にいた世界の神様がいたところと、同じ雰囲  
気がしたから来たんだけど」

「神様……、ああいるわよ。いるけど、ごめん部外者は入れらないのよ」

「そつかあ」

まじかあ。エヘちゃんにお魚上げられないじゃん。願いで祭壇出すのもなあ。  
というか今何してるんだろ。取り合えず★╳╳謎の貝╳╳で聞いてみよ。  
うみみやあ！今日のお魚はまだかみや？

：おおう、元気だなあ。

元気だみやあ！ところで、今日のお魚はまだかみや？

……???

え、待つて待つて、エヘちゃん私の声聞こえてるの？

呼んでないのに？支配してないのに？

聞こえるみやあ！  
みやあ？

おお！聞こえるのか！願いで呼ぶことはできないけど、エヘちゃんと会話出来るなら

いいや！

滂沱の涙を流しながら跪き、あなたはエヘちゃんへと信仰をささげた。

「なんであんた無言で泣いてんの？」

エヘちゃん、後で祭壇願つてお魚あげるからね。

権利書とかは持ち歩いているけど、さすがに祭壇は持ち歩いてないからね。

「なんでもない。そろそろ他のところ見て回るね。

これからよろしく」

「こちらこそ、貴重な参拝客だもの。いつでも歓迎するわ」

乞食はあまり好きじゃないんだけどなあ。けどまあ、紫ちゃんと同じレベルぐらいには強いみたいだし、エヘちゃんとお話しできたりまたお金を惠んであげよう。

私の心は“すくつ”よりも広いからね！

……あれ、願いの魔法のストックあつたつけ？  
ま、まあ杖が確か余つてた……気がする。

# マヨヒガ <<妹”猫”の館>>

そろそろ紫ちゃんにもらつたスペルカードを作つてみようかな。

一応、アイデアはあるんだよね。あと弾幕？だつたかな。

あれは意外と簡単に出せたね。魔法：に似てるけど微妙に違うのかな？  
MPを消費するけど、生きた武器ちゃん装備したりしても威力は変わらなかつたんだ  
よねえ。

<<弾幕>>

消費MP 50 ストック??? LV1／成功100 効果1d6 美しい黄金色の玉  
<<スペルカード：聖夜 核降るノイエルの雪祭り >>

消費MP 856 ストック1 LV1／成功100 効果 炎属性の雪玉

うん、色々と言いたい。まず、成功率高すぎでしょ。100%つて：。

スペルカードは……うん、イメージすると勝手に浮かび上がるつて言われたから、  
ノイエルの聖夜祭Let, s核バーティーを思い出したけど、まさかこんな頭のおか  
しい物になるとは。

炎属性の雪玉つてどういうこと!?

ちよつと試してみよ。

\* \* \* \* \*

……取り合えず、紫ちゃんに報告するかな。

呼んだらムーニングゲートから出てきてくれるかな？

「おーい、紫ちゃん！」

流石に無理があつたかな？

「…ど、どうしたの？ ユキ」

わあお、普通に出てきてくれたよ。

「えつとね、スペルカードと弾幕？ 完成したからその報告するために呼んだんだよ。  
にしても、呼んだらどこにいても出てきてくれるんだね」

「ま、まあ毎回出てくるわけではないけどね。」

良かつたら私の家に来ない？ 歓迎するわよ」

「お、紫ちゃんのお家かあ。いいね！ 行くよ」

「おお、誰かの家に行くのは久しぶりだなあ。」

最後に行つたのは確か……、みんなで呪い酒パーティーやつた時か。

そうだ、お酒といえば…

「ねえ紫ちゃん、この世界の人たちつてお酒飲む？」

「ええ。みんな理由をつけて宴会を開きたがるぐらいにはお酒好きが多いわ」「じゃあこれ、差し入れ？というよりかはこの前の埋め合わせ。

「ごめんね？メテオの処理面倒だつたでしょ？」

パルミアで擊つと王様が喜んで殺しに来るもん。まあ、返り討ちにして食料になつてもらつてるけど（あなたは何でも食べられる）

### 99服のウイスキー

流石に呪い酒は…ね？死人が出たら嫌だし、お酒は祝福してないし…。

祝福水はあまり予備がないからねえ

「ウイスキーってお酒なんだけど知つてるかな？とつてもおいしいお酒だよ！」

「はいこれ」

「こ、こんなに貰つてもいいのかしら？」

「うん！他にもお酒はあるからね、遠慮しないでよ」

呪い酒とか呪い酒とか……ね

\*\*\*\*\*

「ここが紫ちゃんのお家？」

「そうよ。ようこそマヨヒガへ、歓迎するわ」

わあお、この世界の建物は豪華だなあ。

これ、ランクいくつぐらいだろ…。

私の家具詰め合わせ城よりも綺麗なんだけど…。

「お帰りなさいませ紫様。ところで、そちらの子供は？」

「こ、子供…」

確かに伸長低いけどさあ…。

モンスターのミルクでもがぶ飲みしようかな……。

「お客様よ。ユキ、彼女は私の式神の八雲藍よ」

「式神？ペツトみたいなもの？」

「ペツ…、えーっと、家族よ家族」

「家族？ペツトで合ってるじやん。

「なんだ、よろしくね藍ちゃん」

「う、うむ。よろしくな」

自己紹介も済んだし、さつそくスペルカードの試し撃ちを……  
……なんか、家の陰から尻尾が見えるんだけど?

「ね、ねえ紫ちゃん。この家猫でも飼つてるの?」

「猫?……ああ、橙のことね」

「橙?」

「藍の式神よ。橙、いらつしやい」

「は、はい! 橙です、よろしくです!」

驚いた、猫がいるのかと思つたらまさかの“妹猫”とは……

……よし。

「妹猫! よーしょしょしょしょし、お魚食べる? フライから活け造りまでいっぱいあるよ  
!」

「にや、にやあ!? ゆ、紫しやま、藍しやま助け……」

「な、なんか橙にすごい懷いてますね」

「そ、そうね。どうか妹猫つてなに? ……取り合えず、少し待ちましょ」

いやー、相変わらず妹猫は可愛いなあ。

毎回、愛るために鬼ごっこするのは最高だなあ。

# マヨヒガ 【初の弾幕ごっこ】

「お、落ち着いた？」

「うん！いやあ、この世界にも妹猫がいるとは思つてなかつたよ」「妹猫？……多分違うと思うわよ？」

違うのかあ。まあ、可愛ければ何でもいいよね！」

「まあいいや。紫ちゃん、せつかくだから弾幕ごっこ？だつけ、付き合つてくれない？作つては見たもののまだ相手に使つたことがないからさ」「

紫ちゃんを呼ぶ前に少し試したけど、アレは凄いね。

シエルターで試しといてよかつたよ。

折角報告に来たんだから驚いてくれるといいなあ。

「いいけど、実際に使うのはもう少し後になると思うわよ？」

「ん、どうして？」

「弾幕ごっこって概念がまだ広まつてないもの。

妖怪と人間に差が生まれないように作つたルールだけど、一部の人間と妖怪にしか伝えてないから。

まあ、もうじき吸血鬼たちが異変を起こすからその時に弾幕ごっこが広まると思うけども』

「まあまあ、折角作つたんだから試させてよ」

「…わかつたわ。残機、スペルカードともに3回でいいかしら」

「うん。…あ、待つて装備とか魔法つて何を使つてもいいの？」

「ん」、攻撃じやなればいいんじやない？ そうしないと魔法使いが圧倒的に不利になつちやうし。

あ、でも死人が出ないようにするルールなんだから、殺しは駄目よ」

「わかつた」

よし、アレを使うか…。

★シーナのパンティー

「……なに、それ」

「シーナのパンティーだけど？」

「だけど？ ジやないわよ！ なんでパ…パンツを取り出すのよ」

「これすごい武器なんだよ？ 当たつた相手に幻惑を見せて、時間を止めることもできるっていう……」

「橙、お前は見ちゃいけない」

「ふえ？ 藍しやま、前が見えないです！」

さりげなく橙の目隠してるし…

そこまで酷いかな？ 昔すごいお世話になつた武器なんだけど。

「……はあ。ツツコんだ私が馬鹿でしたわ」

「あと、これも」

翼を装備しないと飛べないからね。

わ、私はエーテル病に侵されていない健全な体なのです！

というか、エーテルの風がないなら私の『ヴィンデールクローケ』ゴミじやん！

「あなた飛べたんですかの!?」

「うん……つて紫ちゃんも飛んでるじやん！ なに、この世界の人は羽がなくとも飛べるの？」

「え、ええ……」

「いいなあ、カオスシェイプの友達が羨ましがるだろうなあ」

あの人、「13盾こそ至高！ うみみやあ？ 可愛いもんだぜ」とか言つてたからなあ。

「それじゃあ、行くよ！」

先手必勝！ 速度が全てなのだ！

「行け！パンツ！」

「ちょつ、危な!?」

ムーンゲートで躰されてしまつた。

それするくない？というか私の固定アーティファクトおおお！？

待つて待つて！それ帰つてくるよね！弾幕ごっこ終わつたら帰つてくるよね！？

「ちよつおおお！？それ、帰つてくるよね！？ちゃんと返してくれるよね！？」

「そ、そんなにあのパンツが大事なの！？」

「当たり前だよ！世界に一つしかない貴重品なんだよ！あのパンツのために数か月か  
かつたんだよ！」

貴族が落としてくれないんだもん！どれだけ演奏会を滅ぼしたと思つてるの！？

「え、ええ……（ドン引き）ちゃ、ちゃんと終わつたら返しますわ。

というか、そんなに大事なら投げないでよ！」

そんなこと言われても、あつちの世界だつたら盗まれない限り、投げても帰つてくる  
のに。

「次はこっちの番よ。スペルカード！」 幻巣 飛光虫ネスト』

おつと、紫ちゃんのスペルカードか。

というか、その座り方かつこいいね。ムーンゲートつて座れるものなんだ…。

「数は多いけど、速度はそこまで早くないみたいだね」

速度 300ぐらいかな？

私からしたら止まつて見えるね。

……んー、これ食べたら美味しいかな？ 今日まだハープ食べてないんだよね。

「んつ、はぐつ、あむつ…、あ、意外と美味しい！」

「んなつ!? 弹幕を食べたですって!? そんな馬鹿な…」

「紫ちゃん、これ美味しいね！」

「……（あれつて被弾扱いなのかしら）」

ハープだらけのマズマズ食事から解放された気分だよ。

「それじやあ、次は私の番！ スペルカード！ „聖夜 クリスマス 核降るノイエルの雪祭り“！」

発動と同時に生み出された雪玉は、とてつもない熱を持ちながら紫の方へではなく地面へと向かつていった。

着弾、とてつもない熱を持つていた雪玉はその姿を小さく、そして大量に分裂しながら散り、辺り一面を原型がなくなるほど吹き飛ばした。

……はずだつた。

「ちよと待つて、威力！ 威力がおかしいわ!?」

爆発はした。しかし、爆発のほとんどをムーンゲートに吸われてしまつた。

それするくない？

「ストップ！一旦ストップですわ！」

「ん、どうかしたの？」

「どうかしたのじやないわよ！私じゃなかつたら死んでたわよ！？」

「え、あの程度で…？」

「あの程度つて…？」

「いや、確かに派手に爆発したけど、威力自体はほとんどないはずだよ？」

あれ、範囲を広げて被弾させるのが目的だから、威力自体はほんの少しのはずだよ？」

そうなのだ。

「クリスマス・ハイテイ  
核降るノイエルの雪祭り」は見た目が派手なのと範囲が広いことが特徴の、

目くらましの様なものなのだ。

「ほら、かなりの熱量を持つてたけど、そこまで暑くはなかつたでしょ？」

「た、確かに、言われてみればそうですわね…」

いやだなあ、私が地形破壊なんてするわけないじゃない！（毎年12月にノイエルが

地図から消えるけど）

「取り合えず、スペルカード試せたからいいや。

付き合つてくれてありがとね」

「よ、喜んでもらえたようで何よりだわ」

「お礼に食事をご馳走するよ！流石に紫ちゃんの弾幕だけだと足りないからね。藍ちゃんと橙ちゃんの分も用意するからちよつと待つててね」

さてと、久しぶりに料理するかな。バーベキューで使うのも懐かしいなあ。ついでに工へちゃんのも作らないと、祭壇も出してあげるから待つてね。

\*\*\*\*\*

「お、美味しい。なにこれ、すごい美味しいわ！」

「あ、ああ、これは美味しいな。（どうやつたらバーベキューで魚の活け造りが作れるのだろうか…）

「このお魚、とつても美味しいですう！」

「喜んでもらえてよかつたよ。まだたくさんあるからどんどん食べてね。

この果物パフェとメロンパンが私のおすすめよ」

「考えては駄目よ紫。……なんでバーベキューで果物パフェが作れるのよ！」

「あちやあ、考えちやつたかあ。紫ちゃん、気になら負けだよ。

美味しければそれでいいんだよ

「このメロンパン美味しいです！」

「あ、飲み物はこのラムネを飲むといいよ。

疲れがすぐに取れる凄い飲み物なんだよ！」

やつぱり、ハーブなんかじやなくてちゃんとした？料理を食べると美味しいね！みんなで食べるともつとおいしいなあ。今度は白狼天狗ちゃんたちと食べるかな。数だけはいっぱい居たからね。

ちなみに★シーナのパンティーは無事に返してもらいました。

# ネフイア <<紅魔館>>

「あつ、そうだ。ねえ紫ちゃん、どこかに魔法書を売つてたりする所ないかな？」

「軽傷治癒とか沢山使いそุดからね。ストックして置かないと…。」

「販売はしないけれど、言えば貸し出してくれそなところなら知つてるわよ。  
紅魔館つてところだけど、そこに魔法使いが住んでるから行つてみなさい。同じ魔法  
使いとして貸してくれるかも知れないわよ」

「…紫ちゃん送つてくれない？」

「いいわよ。入口まで連れて行つてあげる」

「ありがと！」

やつた、移動の手間が省けたあ。

\* \* \* \* \*

「着いたわ、ここよ」

「うわあ…赤い」

「中に入れたらパチュリーに用があると伝えなさい」

「わかつた。ありがとね紫ちゃん」

「ん?『入れたら』?」

「それじゃあ、またね」

\*\*\*\*\*

さて、取り合えず中に入りたいのだがこの寝ているガードみたいな人物は何だろうか

?

「すみませーん! 中に入りたいんですけど!」

「うわあ!? え、えーっとどちら様ですか?」

「あ、私ユキです。よろしくね」

「こ、これはご丁寧に、私は美鈴と申します。ところで、どのようなご用件で?」

「えつとパチュリー? って人を訪ねねれば魔法書を借りられるつて、紫ちゃんに聞いたんだけど?」

「

「紫ちゃん!?」

「え？・うん」

「そ、ですか。……けどすみません。私も一応門番として仕事をしないといけませんので」

「倒さないと入れない感じかな？」

「ええそうです。ところで、弾幕ごつこつて知つてますか？」

ああ、紫ちゃんが言つてた一部の妖怪つてのはここの人たちだつたんだ。

にしても、なんで私が弾幕ごつこのこと知つてると思ったのかな？

さつき紫ちゃんの知り合いつて言つたからかな？」

「知つてるけど、いいのそれで？」

「……と、言いますと？」

いや、見た感じ肉弾戦の方が強そうなんだけどなあ。

動きに無駄がほとんどないし：。

「こつちの方が好きなんじやないの？」

さて……と

防弾服と重層籠手を装備しますかね。

これで気づいてもらえるかな？

「…へえ、あなたも武術の心得が？」

「そんなんじやないよ。私のは趣味かな。それでどうするの？」

「ではお言葉に甘えてこちらで」

「おっけー。それじゃあルールだけど、美鈴ちゃんが諦めるか気絶したら負け。  
私は…そうだね、しつかりと一撃入れられたら私の負けでいいよ」

「……ずいぶんと優しいですね。甘く見ると痛い目見ますよ」

「ふふつ、そのセリフは一撃入れてから言つてほしいかな？」

「それじゃあ、行きます！」

「つと、速いなあ。白狼天狗より全然速いや。

速度200ぐらいかな？」

「いいね美鈴ちゃん。阿修羅より強いと思うよ」

「その阿修羅さんという方がどなたか知りませんけど、そう簡単に止められると素直に喜べないです…ね！」

「おつと、重層筆手越しなのに痺れるなんて久しぶりだよ」

「これは…、久しぶりに楽しめそうかな。

（2時間後）

さ、流石に飽きてきたかも…。

門の周りは美鈴の拳でぐちやぐちやだし、地面も踏み込みのせいで凹んでるし…「そ、そろそろ諦めない？紅魔館が悲惨なことになつてるのはいいの？」

「え……あっ」

「き、気づいてなかつたんだ。集中しすぎでしょ…。それで、どうするの？まだやる？」

「これで諦めてくれなかつたら氣絶させよ…うん。

「……いえ、このままやつても勝てませんので諦めます」

「ん、お疲れ。はいこれ、ラムネだよ。飲むと疲れが取れるからね」

「これはこれは、ありがとうございます。んくつ…、ん、ごくつ、ごくつ…。冷たくて美味しいですね！」

「気に入つて貰えて良かつた……よ」

「おつと、視界が白黒に……ん？ 時止弾を撃ち込まれた様子もないのにおかしい…。」

「美鈴、何を遊んでいるのかしら？」

「げつ…咲夜さん。ち、違うんです。別に遊んでいたわけでは」

「知つてるわ、見ていたもの。それで？あなたは館をボロボロにしておきながら何を呑

「気に飲んでいるのかしら？」

「す、すみません！すぐに直しますので！」

そう言うと美鈴ちゃんは走り去つてしまつた。

「まつたく…。ご挨拶が遅れてすみません。私はこの館のメイドである咲夜と申します」

「私はユキだよ。よろしくね」

「よろしくお願ひします。早速ですが、ユキさん。お嬢様がぜひお会いしたいとのことで、着いてきていただけますか？」

「分かつた、着いてくよ。ところで咲夜ちゃん、さつき時間止めたりした？」

「!? ……どうしてそう思われたのですか？」

「私のペットに時間を止められる子がいてね、その子が時間を止めた時と似てたからかな」

「そういえば、私のペットたちは今何をしているんだろう？」

「自宅警備でもしてるのかな？」

「…ええ、そうですね。私は自由に時間を止める事ができますわ」

「じ、自由があ。いいなあ。

「そつかあ。…あ、ごめんね話し込んじやつて。そのお嬢様?のところに案内してもらえるかな?」

「いえ、私も能力をどうやつて見破つたのか気になりましたので。それでは案内させていただきますね」

にしても、見てたなら2時間も立つ前に止めてほしかつたなあ……。

# ネフィア <<紅魔館>> ver2

「ここがお嬢様のお部屋です。その、カリスマ性の高い方ですので、あまり笑わないようにお願いします」  
ど、どんな子なのかな？」

……折角だから、ちょっと遊んでみよ。  
「咲夜ちゃん、ちょっと待つてて」

「はい？」

“インコグニート”

変装魔法。

いや、廃人になる前は町に入るためによく使ったなあ。

今じゃガード全員、サンドバッグ吊りだからなあ。

「さてつと……、お、これは紫ちやんだ。

えーっと、……ほん。お待たせしましたわ。これで大丈夫ですよ」

お、咲夜ちゃん驚いてる驚いてる。

「魔法……ですか？」

「おお、よく分かつたね。せつかくだから驚かせてみようと思つて」「なるほど。それはそれは、とても面白そうですね」

「うん？ 咲夜ちゃん、君結構お嬢様を揶揄うの好きでしょ。

「お嬢様、お客様をお連れしました」

「入りなさい」

「失礼しますわ」

「失礼します」

「へえ、この女の子がお嬢様ねえ。

「靈夢ちゃんや紫ちゃんと同じ強さかあ。

「ようこそ私の館へ。あなたがユキね、さつきの戦闘は見てい……

つて、なんでスキマ妖怪がここにいるのよ！」

ふふふつ、気づいてないみたいだね。可愛いなあー。

ていうか、なんで私の名前知ってるの？

「あら、私がここに訪れたらダメかしら？」

「ちよ、咲夜！ なんでスキマ妖怪を連れてくるのよ！ 私は美鈴と戦つてた子を連れてきなさいって、言つたはずよ!?」

「お嬢様、美鈴と戦つていたのはこの方ですよ？」

「そんなわけないじやない！金髪の私ぐらいの大きさの女の子が戦つてるの、あなたも見てたでしょ!?」

いやー、新鮮な反応でうれしいよ。

「さつき美鈴と戦つていたのは私でして……よ。

おつと、時間切れみたい。……ってなわけでどうもユキです、よろしくね！」

いい所で時間切れちゃつたなあ。

「……フ、フフフツ。私を揶揄うなんていい度胸じやない」

「可愛かつたよ？」

「そういうことを聞いてるんじゃないわよ！……はあ、疲れたわ。咲夜、お茶を入れて頂戴。

「というか、あなたもグルだつたのね」

「お嬢様、可愛かつたですよ？」

「うるさいわよ！早くお茶入れてきなさいよ！」

「かしこまりました」

\* \* \* \* \*

「それで、ユキは何しに来たのかしら？」  
「パチュリーって人に会えば魔法書を借りられるつて、紫ちゃんに教えてもらつたから来たの」

「紫……ちゃん？ ユキ、今度会つたら隙間BBAと言つてあげなさい。

…といふか、美鈴と渡り合えるぐらいの武術を持ちながら魔法を使いたいとは」

「まあ、私の本業は魔法使いだからね。さつきのはあくまで趣味の一つだよ」

そういえば、防弾服と重層筆手から変えてなかつたなあ。

法王衣と細工筆手に戻しとかないと…。ついでに杖も装備しておくかな。

「ほら、魔法使いつぱいでしょ？」

「そうか魔法使いか…。なあユキ、パチエに会つた後でいいから私の頼みを聞いてもらえないか？」

もちろん、それ相応の報酬は払うつもりだ」

おつとクエストですかあ。久しぶりに受けるなあ。

「どうかパチエって誰？」

「わかった。それじゃあ後でこの部屋に戻つてくるね。早速パチュリーチャンのところに案内してもらえないかな？」

「わかつたわ。咲夜、ユキをパチエのところに連れて行つてあげて」

……え、私はパチュリーチゃんに会いたいんだけど。パチエって誰？

# ネフイア ◀◀紅魔館▶▶ ver3

「おお、すごい本の数だね！」

「パチュリー様、お客様がお会いしたいとのことでお連れしました」

「私に会いたいなんて、どちら様かしら」

お、この子がパチュリーちゃんかな？  
いかにも魔法使いって感じだね。

「あなたがパチュリーちゃんかな？私はユキ。あなたに会えば魔法書を借りられるつ  
て、紫ちゃんに聞いたんだけど」

「私がパチュリーで合つてるわ。パチュリー・ノーレッジよ」

「ノーレッジ……『知識』かあ。これは期待できそうかな？」

レミリアちゃんと同じ強さだし、この館は強い人しかいないのかな？

「よろしくねパチュリーちゃん」

「よろしく。それで魔法書だけど、貸すのは構わないけど代わりに何か頂けるかしら？  
まさか対価なしに借りられるとは思つてないわよね。魔法使いと対価は深い関係に  
あることぐらい、あなたでも分かるでしょう？」

いや、全くわかんない。

ただ、対価が必要なのはよくわかるよ。クエスト達成したのに呪い装備でテレビポートして、報酬を支払わない奴に会うとつい殺しちゃうもん。

にしても対価……対価かあ。

「ある程度の物は出せると思うけど、何か欲しいものある？」

「知識と魔法関連の道具が欲しいわね。まず、あなたが使える中で最も価値のある魔法を見せてもらえるかしら？」

「価値のある魔法？ 収穫……いや、願いかな。

「分かった。願いの魔法でいいかな？」

「願いの魔法？」

あれ、結構有名だと思つたんだけど。便利だし。

……も、もしかして、ありきたりすぎて価値がなかつた！？

「うん、願いの魔法。あらゆる願いを一度だけ叶えられる魔法だけど、

……もしかしてこれじゃダメだった？ 他となると四次元ポケットか収穫ぐらいになっちゃうけど」

「……いえ、それで構わないわ。それじゃあ使つて見せて」

「使うのは構わないけど、何か欲しいものある？ せつかくだからそれを願うけど」

「いえ、特にはないわ」

「そつか。それじやあ」

### 願いの魔法

あらゆる願いを一度だけ叶える魔法。

：せつかくだから、もうちょいレミリアちゃんを揶揄つてみるかな。

「願い レミリアのパンツ！」

おお、これがレミリアちゃんのパンツかあ。予想通り子供パンツだつたなあ。  
……これ、少し温かいんだけど、もしかして履いてた奴？  
予備のパンツが手に入ると思ったんだけどなあ。

「という感じで、願い事を叶えることができる魔法だよ」

「願いの魔法については分かつたけど、……どうしてレミィの下着にしたの？」

「え、なんとなくだけど」

「そう」

「知識はこれでいいかな？」

「構わないわ。まさかそんな魔法が存在するなんてね」

あ、ああなんだ知らなかつただけか。びっくりした、願い程度の魔法じやダメなのか

と思った。

「それじゃあ、次は魔法関連の道具……ケホツ、ゴホツ…ゴホツ…を見せてもらえるかしら？」

「だ、大丈夫？」

「平気よ、いつもの喘息だから」

「いつものつて、魔法で治せないの？」

「試したけど、無理ね。怪我は治せても病気はキツイわ」

「パチュリー様、喘息のお薬をお持ちしました」

「うわあお、咲夜ちゃん。時間を止めて来たのかな？」

「どうか、私の近くで時間が止まつてると私でも認識できる感じなのかな。

「ありがとう。ところでレミイは今何をしてるのかしら？」

「お嬢様は今お着替えをしています。何でも、下着がいきなりなくなつたのだとか」「さつきの魔法は本当に発動していたのね」

「疑つてたのかい。

「魔法ですか？」

「あー、気にしなくていいよ咲夜ちゃん。…………そだ！魔法関連の道具だけど、ポーションでもいい？」

「構わないわ。特殊なポーションならね」

「『聖なる癒し手ジュアのポーション』って物なんだけど、飲めばあらゆる病気と怪我を治せるの。

もしかしたら、喘息も治せるとと思うから飲んでみて」

「ありがたく頂くわ。……これは、凄いわね。さつきまであつた息苦しさが、嘘みたいになくなつたわ……」

「お、ちゃんと治つたみたいだね。それは良かつた」

「……ユキ、助かつたわ。お礼になるか分からぬけど、魔法について聞きたいことがあつたら聞いてちょうだい。

できる限り手伝うわ。魔法書も好きに読んでいいわよ」

「やつた！　あ、そうだ。咲夜ちゃん、レミリアちゃんを呼んで貰える？　パチュリーちゃんとの用事が終わつたから、ここまで来てほしいって

伝えてほしいんだけど」

「少々お待ちくださいませ」

「つと、また白黒に……。咲夜ちゃん時間止めるの好きだねえ。  
さて……と、下着を取られたレミリアちゃんの反応が楽しみだよ。

# ネフィア <<紅魔館>> ver4

「私を呼び出すなんていい度胸じゃない」

「レミリアちゃん、そんな態度取つていいのかなあ？」

「どういう意味よ」

「これなんだ？」

レミリアちゃんのパンツ、まだ温かいなあ。

「んなつ…!? な、なんであなたが私の下着を持つているのよ！」

「私が魔法で取つたからだよ？」

「か、返しなさいよ！」

「レミリアちゃん、お嬢様なのにこんなお子ちやまパンツ履いてたんだあー」

「うるさいわね！ いいから返しなさいよ！」

「レミリアちゃん……、これちょっと湿つて」

「あー、もう！ 咲夜！」

「かしこまりました」

おつといつの間にか取られてしまつたようだ。

認知は出来ても反応できないから時間停止は辛いなあ。

……まつたく、お子ちやまなんだから。

\* \* \* \* \*

「それで？パチュリーチ янに会う前に頼みがあるって言つてたけど、どうかしたの？」  
「な、なんか納得でききけどまあいいわ。頼みというのはフランのことよ」

「フラン？」

「フランドール・スカーレット。私の妹よ。あの子は生まれた時から狂気に苛まれているの。」

神話生物にでも遭遇しちやつたのかな？

「パチュリーリーが狂気を取り除こうとしたけど、出来なかつた。

だから、パチュリーリー以外の魔法使いであるあなたにお願いしたの。

取り除けたら何でもするわ。だから、お願ひ。あの子を救つてあげて

ん、今何でもするつて……。

まあ、いいや。狂氣かあ…。

「うーん、出来るだけやつてみるよ」

「あの子は”ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”を持つていてるわ。

……気を付けて」

即死みたいなものかな？」

\* \* \* \* \*

「ここがフランちゃんのお部屋かあ」

「そうよ。この中にフランはいるわ。：無理、だけはしないで」

コンコンツ

「だれ？お姉さま？」

「お邪魔しまーす」

「あなたは誰？」

「私はユキだよ、よろしくね。早速で悪いけど、ちょっと我慢してね？」

もしかしたら痛いかもしねないから」

「え？」

“グラビティ”

術者を除く視界内の全員に浮遊無効化の状態異常飛ばれると面倒だからね。

「ちよつと動けなくなつてもらうよ」

「なにこれ…、うごけない」

“浄化の杖”

鈍足や死の宣告などの呪い（hex）を解く魔法が込められた杖：呪いならこれで行けると思うんだよなあ。

イス系見た時と同じ狂気なら、別の方法を取るけど…。

「……どう？狂氣？だつたかな解けた感じする？」

「うそ…、体が軽い…、あ、あの声が聞こえない…」  
んー、大丈夫だと思うんだけどなあ…。

一応保険もかけておくかな。

”聖なる癒し手ジユアのポーション”も飲ましてみよう。

「フランちゃん、これ飲んでみてくれる？というか、飲ませるね

「ふえつ？んくつ…、んくつ、ごくつ」

ユニコーンの角でもよかつたけど、友好的かどうか分かんないからね。

……よし、これでもう大丈夫でしょう。

確認してみよ。

願い フランの狂気度減少

ブランドール・スカーレットの狂気度は0です。

うん、大丈夫っぽいね。

というか、最初からこうすればよかつた。

なんで私余計なことしてたんだろ……。

「レミリアちゃん、何とかなったよ?」

狂気度確認したけど0だし、浄化もしたから狂気に陥ることはないとと思うよ」

「本当に?本当にフランの狂気は解除できたの?」

「うん、私が保証するよ」

というか、これで治らなかつたら困る…。

「お姉さま…、私、声が…、いつも聞こえてる声が聞こえなくなつた…の」

「フランツ! …ごめんなさい、あなたをこんなにも長く幽閉して…」

「お姉さま…」

「けど、それも今日まで。…これからは一緒にお外で遊べるの、これからは一緒に暮らしていけるの」

「あ、ああ…、お姉さま…。お姉さまっ！」

「よしよし、…今まで本当にごめんね」

「ああー、これが百合ですか。」

「素晴らしいなあ、美しいなあ。」

「…後で、媚薬でも二人にあげようかな？」

\*\*\*\*\*

「ユキ、ありがとうございます。本当にありがとうございます」

「いいつてことよ。ただ、対価はちゃんと貰うよ？」

「何でもするつてレミリアちゃん言つたからね」

「…ええ、私にできることなら何でもするわ」

「それじゃあ、ここに住まわせてもらつていいかな？」

「私、この世界に来たばかりで住むところがないんだよね」

「そんなことでいいの？」

「いや、そんなことつて…」

け、結構重要なことじゃない？乞食が住まわせてほしいなんて言つてきたら、私だつたら殺してるところだよ？

「もちろん構わないわ。その方が、フランや咲夜も喜ぶと思うしね」「なら決定だね。これからよろしく」

「こちらこそ、本当にありがとうございます」

「いいって、私も対価を貰つてるからね」

……思ったのだが、ここで一度死んでおけば向こうの世界に戻れたのではないだろうか？

まあいいや。その気になつたら首を吊ればいつでも死ねるし、気楽に暮らしますかね。

# ホーム ＜紅魔館＞【日常編】

「ユキ、今日からこの部屋を使つてちようだい」

「おお、結構広い部屋だねえ。」

「綺麗な部屋だね。気に入つたよ」

「気に入つてもらえてよかつたわ。それじゃあ、夕食時にあなたのことをみんなに紹介するわ。

それまで自由に時間を潰していく頂戴。時間になつたら咲夜が呼びに来るから」

「私も手伝おうか？」

「あなた料理できるの？」

「料理？ 当り前じやないか！ 私のプロ級の料理を見せてあげようか？」

「もちろん！ いろいろ作れるよ」

「まあ、今日は咲夜に任せなさい。あなたの歓迎会でもあるのだから」

「お、嬉しいこと言つてくれるねえ。ちゃんとした歓迎会とか初めてだなあ。

どこかの緑ゴキブリは私の歓迎に、人肉投げつけてきたからなあ。

核で殺したけど。

「そつか、それじやあ私はフランちゃんと遊んでくるね。狂気の確認もしたいし」「分かつたわ。それじやあ、また夕食時にね」

「うん」

さてと、図書館行くかあ。

\* \* \* \* \*

「パチュリーチayan、フランちやんどこ？」

「フランなら地下の自室にいるわ。狂気が解けたとはいえ、混乱しているんでしようね」「どうして？」

解けたならいいんじゃないの？」

「400年以上も狂気のせいで地下に幽閉されてきたのに、いきなり狂気が解けたから外に出ていいよ。なんて言われても困るでしそうね」

：わあお。400年も幽閉してたのか。そりや混乱するわ。

「よし、私が連れてきてあげようじゃないか」

\*\*\*\*\*

コンコンツ

「？ お姉さま？」

「私だよー。さつきはごめんね？ いきなり魔法撃つたり、液体飲ませたりして」

「ううん。私の為にやつてくれたんでしょ？ ありがとうねお姉さん」

「そつか、ところでどうしてまだ地下にいるの？ 一緒に外で遊ぼうよ」

「…分からないの。狂気がなくなつたのは私でも何となくわかるのだけど、

今まで外で遊んだことないからどうやって遊べばいいのか…」

なんと、遊び方を知らないとは。

それじゃあ、私が遊びというものを教えてあげようじゃないか。

「それじゃ、一緒に遊ぼ？ 私となら退屈しないことを約束するよ」

「お姉さんが？…えっと、」

「ユキだよ。フランちゃん」

「ユキお姉ちゃんが一緒に遊んでくれるの？」

「…ゴフツ。わ、私がお姉ちゃんと呼ばれる時は。今まで散々、お兄ちゃんお姉ちや

んは言つてきたけど、まさか私が言われるとは…。破壊力がやばいです、はい。  
「もちろん、お姉ちゃんに任せなさい！」

さて、レミリアちゃん。私とフランちゃんの遊び道具になつてもらうよ。

\*\*\*\*\*

「さて、フランちゃん。私がさつき説明した通りにやつてね」

「うん。……けど、本当にいいのかな？」

「大丈夫！私が保証するから」

「ユキお姉ちゃんがそういうなら、やつてみるね」

「よし、ターゲットはこのドアの向こうにいるから、私が合図したら作戦通りにお願い  
ね」

「分かつたわ」

作戦はこうだ。

まず、二人でレミリアちゃんの部屋に行く。

私の合図で“加速のポーション”を飲む。

あとは、ひたすら『雪』を投げつける。

以上！ 最高の遊びだね。ストレス発散にもなるし、誰もケガをしない。  
これほど素晴らしい遊びがあるだろうか？

「はい、フランちゃん。これが『加速のポーション』ね。それでこっちが『雪』ね。  
取り合えず、ポーションは3個、雪は部屋の隅に大量に置いておくから。  
なくなつたら補給してね」

「でもいいのかな？お姉さまに怒られないかな？」

「大丈夫！笑つて許してくれるから。

んじゃ、行くよ」

「あつ、待つて」

コンコンツ

「入りなさい」

「お邪魔するね」

「お姉さま…」

「あら、ユキにフランじやない。一体どうしたの？」

「今からレミリアちゃんで『遊ぼうと思つて來たんだよ』

「そうだつたの。……ん、今おかしくなかつた？私と遊ぶじやなくて、私で遊ぶ？」

「おかしくないよ？ その通りだからね。

「フランちゃん！ やるよ」

「え、 …う、 うん」

「ちよつとユキ！ フランに何を吹き込んで……」 べちゃ

「フランちゃん、 ここに置いておくからね」

「うん♪」

「なんやかんや言いながら、 ノリノリじゃないかフランちゃん。

「ちよつと！ やめなさ……」 べちゃ

「あはははは。 お姉さまが雪まみれ」

「フラン！ あなたもやめ……」 べちゃ

「レミリアちゃん、 楽しい？ フランちゃんは楽しいよね？」

「うん！ ユキお姉ちゃん、 すごい楽しいよ！」

「それは良かつた」

「何もよくないわよ！」 べちゃ

フフフツ、 レミリアちゃん。 加速のポーションを飲んだフランちゃんと、 私の速度に追いつけないでしょ？

楽しいなあ。 加速のポーションもいっぱいあるし置いておくかな。

「30分後」

部屋が雪まみれになってしまった。おつかしいな、室内なのになんてだろ？あと、10分前ぐらいからレミリアちゃんの反応がなくなつたんだけど、怖いなあ。「おつと、雪がなくなつちやたか。フランちゃん、雪のストックがなくなつたから終了ね」

「はい。ユキお姉ちゃん、すごく楽しかつた！私、こんなに遊んだの初めて」

「それは良かつた。それじやあ、風邪をひかないうちにお風呂にでも入りにいこつか」「うん！」

いやあ、楽しかつたなあ。ノイエルの雪まつりの気分を味わえたよ。

「……どこに行こうというのかしら」

「げつ、レミリアちゃん復活はや!?

て、テレポートで逃げよう、うん。

「フランちゃん！テレポートア「咲夜！」……ザー」

不味い不味い。時間停止はずるいつて！

取り合えず、フランちゃんはテレポートでこの館のどこかに飛ばせたけど、やらかしたなあ、逃げ場がなくなつちやた。

「さ、咲夜ちゃん。手を放してくれないかな?」

「ダメです。一体誰が、この部屋を片付けると思っているのですか?」

「片付ける!全部片づけるからさ」

「そうですね、全部片づけて下さるのなら私は手を放しましよう。

お嬢様が見逃してくれるかどうかは分かりませんが」

「え?」

「ユキ…、いい度胸じゃない。フランにまで余計な事を吹き込んで……」

あ、これマジギレしてる。うそおん。

その後、2時間以上説教されました。……解せぬ。

# ホーム ＜紅魔館＞【異変準備】

「みんなに紹介するわ。彼女、ユキが私たち紅魔館のメンバーに加わることになつたわ」「これからよろしく。まあ、みんな私に会つてるとと思うけどね」

「私は初対面ですよ？」

「ん？ あれ、君は？」

「私は小悪魔です。普段はパチュリー様のお世話をしていますね」

「ああ、こあのことは気にしなくていいわよ。雑用みたいなものだから」

「ちよつ、パチュリー様！ それはないですよ！」

「パチュリーちゃんのペツトかな？」

「それで、レミイのことだからユキの紹介のためだけに、私たちを集めたわけじやないでしょ」

「もちろんそれだけじやないわ。そろそろスキマ妖怪との約束の日になるから、みんなには異変の準備をしてほしいの」

「異変？」

「それについては私が説明しますわ」

おつと、紫ちゃんかあ。目の前にムーンゲートが湧くのはびっくりするなあ。

「紫ちゃん、久しぶりだね」

「ええ、お久しぶりですわね。それで異変ですけども……あれ、私以前あなたに言いませんでしたつけ？」

「え？ いや、確かに吸血鬼がもうすぐ異変を起こすみたいと言つてたけど…」「その異変ですか」

「??? あれ、異変を起こすのは吸血鬼じゃないの？」

「それであつてますわ。だからこうして、お子ちやま吸血鬼のところに来たのですわ」

「おい、お子ちやまは余計だ」

「……もしかして、レミリアちゃんって吸血鬼だつたの？」

「今まで気づいてなかつたの！」

「ちなみに私も吸血鬼だよー」

「な、なるほど。レミリアちゃんとフランちゃんは吸血鬼だつたのか。

血を吸うフイートとは珍しい…」

「ユキのためにもう一度説明しますと、弾幕ごっこを幻想郷に広めるために異変を起こしてもらうのよ。

⋮ 異変の内容は決まつたかしら？」

「ああ。血のようない紅い霧を広げて、忌々しい太陽を覆い隠す予定だ」

「……分かりました。タイミングは任せますわ」

「ねえ、紫ちゃん。それ私も参加していいんだよね？」

「え、……あなたも参加するんですの？」

「ちよつお!? 私は参加しちゃダメなの!!」

「ダメ?」

「……くれぐれも死者を出さないようにお願ひしますわ」

「だ、出さないよ!」

「なんで死人が出る前提なのさ。

「それでは、準備の方お願ひしますわ」

「全く、私のことをなんだと思つてるのさ」

「パチエ、早速やるわよ。みんな配置について頂戴。

「ユキとフランは……そうね、遊撃に回つてもらつていいかしら?」

「オッケー、一緒に頑張ろうねフランちゃん」

「うん! ユキお姉ちゃんと一緒に頑張る」

「ところで、レミリアちゃん。この館つてどれぐらい頑丈かな?」

「どれぐらいって、パチエが結界を張つてるから簡単には壊れないはずよ?」

「ええ、普通の魔法やスペルぐらいじや壊れないようになってるわよ」

「そつか、ちょっと試しに魔法撃つてみていい?」

「いいわよ。ただ、窓ガラスは割らないようにな」

「分かった。んじゃいくよ、みんな離れててね」

よし、あれだけ離れてたら大丈夫かな?

試しておかないと、万が一弾幕ごっこ中に館が壊れて生き埋めになんてしちゃった  
ら、殺人になっちゃうしね。

向こうの世界だつたら気にしなかつたけど…。

“魔力の嵐”

術者を中心とした魔法属性の範囲攻撃

パチュリーチやんの結界があるなら本気でやつても大丈夫かな。

☆祝福された古なる杖『黄昏の終焉』(1d23)(20)「15, 0」

それはミスリルで作られている

それは酸では傷つかない

それは炎では燃えない

それは生きている「L V : 100 EXP : 0%」

それは武器として扱うことができる (1d23 貫通 0%)

それは片手でも扱いやすい

それは攻撃修正に20を加え、ダメージを0増加させる

それはDVを15上昇させ、PVを0上昇させる

それはより高度な詠唱を可能にさせる「\*」

それは使用者の生き血を吸う「\*\*\*\*\*+」

それは魔法の威力を高める「\*\*\*\*\*+」

さて、どうなるかな……。

……やりすぎた。まさか紅魔館の2階から上が無くなるとは

# ホーム <<紅魔館>> 【異変開始】

「少し予定は遅れたけれど、これで無事に異変として成立したわね」  
「……」

あの後、崩壊した紅魔館を立て直すのに二日掛かつてしまつた。  
しようがないじやん！もう少し頑丈だと思つたんだもん！  
にしても、この世界でもハウスボードは使えるんだね。

使えなかつたら今頃、館建築をしてたよ…。

「ユキ、お願ひだから館に被害が出るような魔法は使わないで頂戴」  
「すみませんでした」

「分かればいいのよ。：そろそろ解決組が来ると思うからフランと行動しておいて」  
「了解」

解決組つて、一体誰が来るんだろう？

\* \* \* \* \*

「お、早速美鈴ちゃんがやられたかあ。やつぱり、美鈴ちゃんは接近戦の方が得意みたいだね」

「どうするのユキお姉ちゃん？ 美鈴のところに行く？」

「んー、そうだね。フランちゃんは図書館に行つてもらえるかな？ パチュリィは喘息が治つたばかりだし、心配だからさ」

「分かつたわ。けど、ユキお姉ちゃんはどうするの？」

「私はそうだね、咲夜ちゃんの手伝いにでも行つてくるよ。この家で人間なのは咲夜ちゃんだけっぽいからね」

「ユキお姉ちゃんも人間でしょ？」

「私は人間じやないよ。詳しく述べるにはメシエーラとかエーテルとか、いろいろ説明する必要があるから省くけど、私は人間じやないので！」

「そ、そりゃなんだ」

「うん。……それじゃあ、今から別行動ね。フランちゃん、気を付けてね」

「ユキお姉ちゃんもね。……ねえユキお姉ちゃん。頑張つたら何かご褒美が欲しいなあ」

「ご、ご褒美かあ。気持ちいいこと……いや、やめておこう。

「そうだね。それじやあ、ご褒美を用意しておくよ。だから頑張つてね？」

「うん！ ユキお姉ちゃんも頑張つてね！」

「もちろん、頑張るよ」

さて、そろそろ私も働きますかね。

\*\*\*\*\*

おっと、あれは靈夢ちゃんじゃないか？

「あれ、靈夢ちゃんじやん。やつほー」

「…ユキ？ どうしてあなたがここにいるのかしら。あなたも異変解決に？」

なるほど、解決組つてのは靈夢ちゃんのことだつたか。

ていうか、咲夜ちゃんがやられてるじやん。嘘でしょ、どうやつて時間停止に勝つた

の！？

「いやあ、残念ながら違うかな。どちらかというと、異変を起こす側だからね」

「そう。それじやあ、あなたも退治させてもらうわ」

ちよ、躊躇いなしかい。まあ、その方が慣れてるからいいけどさ。

「スペルカード・残機は三つずつでいいかな?」

「構わないわ」

「それじゃあ、早速。先手必勝! スペルカード! „演奏 不穏なバーティーカー会場

“!”

ユキの生み出した9つの弾幕は、それぞれ靈夢へとは向かっていかず近くの“壁”に向かつてぶつかつていった。

壁にぶつかつた弾幕は、その数を倍にし反射して廊下中を埋め尽くす。  
うわあお、思つてたよりも綺麗だねえ。

「つち、あんたも面倒なモノを作るわね。……スペルカード! „夢符 封魔陣“!」

靈夢の生み出した弾幕は、壁に残留しながらユキの生み出した弾幕を相殺し、その数を徐々に減らしていった。

うつそ、性質に気付くの速すぎでしょ。というか、弾幕が残つてるつてずるい!

「だつたら、これ! スペルカード! „聖夜 核降るノイエルの雪祭り“!」

大量の弾幕で埋め尽くしてやる! 弾幕は大量の方が強いのさ。

「これぐらいな……」

「おつと、飛ばせないよ」

魔法 グラビティ

ちやあんと、地面を歩きましょうねえ。ついでに視界も奪うかな。

### 魔法 閨の霧

視界範囲内の任意の座標近辺（ $5 \times 5$ ）に閨の霧を発生させる。

飛べないし見えないという地獄を味わうがいい！

「…お、今当たつたね？ いえーい被弾1回目」

「1回でブレイク出来たなら十分よ」

「強がつちやつてえ。まあ、私はあくまで前座だからこれで終わりにしようか。スペ

ルカード！」『迷宮 終わりの迫る彈幕道』！

「何よ、さつきよりも随分と楽じやない」

「本当にそうかな？」

一見するとただの弾幕の嵐であるが、このスペルは時間が経つほど不利になっていくのだ。

しばらく様子見かな？ にしても、『魔法の自動発動』なんてことまで出来るとは、スペルカードは便利だなあ。

「何を言つて、…そういうことね。考えるじやない」

### 魔法 壁生成

視界範囲内の任意の座標に壁を作り出す。

「ほらほら、速く私を倒さないとどんどん逃げ道がなくなつていくよ！」

そう、ただの弾幕の嵐であるこのスペルの怖いところは、徐々に壁が生えてくるとうところだ。

逃げ道を失った獲物は最終的に弾幕の餌食になるのだ。

「だつたら、スペルカード！　『靈符 夢想封印』！」

おつと、さすがに反撃してきたかな。

このまま倒しちやつたらレミリアちゃんが退屈しちゃうだろうし、素直に当たつておくかな。

「これでお互いスペルブレイクよ」

「そうだね、3枚使用で私の負けだね」

「……なんであんた避けなかつたのよ」

「私はあくまで前座だからね。ラスボスの役目を奪つてはいけないのだよ。

それじやあ、またね靈夢ちゃん。ラスボスのレミリアちゃんはこの先にいるよー」

魔法 テレポート

同階層のランダムな座標へテレポート

進入不可能な地形には飛ばない。

今の、かつこよくない？捨て台詞言つてからのテレビポートつて悪役みたいでかつこいいでしょ？

それにしても、霊夢ちゃん強かつたなあ。こりやあ、レミリアちゃんの負けかな。

# ホーム ＜紅魔館＞【異変解決】

さて、今頃靈夢ちゃんはレミリアちゃんのところかな？  
パチュリーチちゃんとフランちゃんがどうなつてるか気になるし、図書館に行つてみるかな。

\*\*\*\*\*

「『禁忌 レーヴアテイン』！」

お、やつてるやつてる。パチュリーチちゃんは…、あちやあ負けちゃつたか。  
にしてもあれ熱くないのかな？なんかすごい燃えてるけど…。

解決組は…何あの子、いかにも魔法使いです。つて感じの見た目だけど…。  
法王衣とは違うみたいだね。

「パチュリーチちゃん大丈夫？」

「…なんとかね、あなたに喘息を治してもらつておいてよかつたわ。いつもみたいに魔

「法の詠唱中に喘息が起きたらと思うと、ほんと助かつたわ」  
「それはよかつた」

心配するまでもなかつたかね。

あれ、何か忘れているような気が……

「どうやら終わつたみたいね。ところで、ユキは何をしてたの？ フランとは別々で行動してたみたいだけど」

「私？ 私は靈夢ちゃんと戦つて……」

あれ、そもそもなんで靈夢ちゃんと戦つたんだ……つけ

あ……、

「やっぱ、咲夜ちゃんのこと忘れてた！ 「ごめんパチュリーチゃん、ちょっと咲夜ちゃんの様子見てくる」

「そう、行つてらっしゃい」

やばいやばい、完全に放置してた……。

大丈夫かな？

\* \* \* \* \*

「咲夜ちゃん大丈夫？」

「ええ、大丈夫ですけれど、まさかそのまま放置されるとは思いませんでした」

「ご、ごめんね？ お詫びと言つては何だけどこれあげるね」

『聖なる癒し手ジュアのポーション』

「ありがとうございます。 んつ、これは…すごいですね。 さっきまでの怪我が嘘みた

い…」

「無事でよかつたよ。 それじや、私はちよつとレミリアちゃんの様子を見てくるね」

「お待ちください。 私も同行いたしますわ」

「ん、じゃあ一緒に行こうか」

さて、レミリアちゃんは霊夢ちゃんに勝てたかな？

\* \* \* \* \*

『靈符 夢想封印』

お、ちょうど終わつたところかな。

やっぱ負けちやつたかあ。

「お疲れ、靈夢ちゃん。異変解決おめでとう！」

「戦つてた相手に言われると、なんか釈然としないわね。それにそこのメイドも、もう治つたの？」

まあまあ、いいじやん。私はスペルカードの実験がてら手助けしただけだし。

「ユキ様が下さつた薬のおかげでね」

「ところで、図書館にいた魔女つ娘は靈夢ちゃんの知り合い？」

「魔女つ娘…、ああ魔理沙のことね。そうよ」

「あの子パチユリ一ちゃんに勝つなんて結構すごいね」

「うかしら？ ただの火力馬鹿よ、たまたま相性が良かつただけでしょ」

き、厳しい。靈夢ちゃん、その魔理沙ちゃんつて子に厳しくないかい？

「おいおい靈夢、そりやないぜ。それに弾幕はパワーだぜ！」

つと、噂をすればってやつだね。

「はあ、ユキ紹介するわ。こいつが話してた魔理沙よ」

「よろしくね魔理沙ちゃん。私のことはユキつて呼んでね」

「おう、よろしくな。ところで、そこのメイドは誰なんだぜ？」

「私？ 十六夜咲夜よ」

「ところで、魔理沙ちゃんって魔法使いい？」

「おう、そうだぜ。もしかしてユキもか？」

「うん、私も魔法使いだよ」

いつもの装備にしておくかな。（法王衣十杖）

「ユキ様、その杖は…」

「大丈夫、使わないから、見せただけだからさ。

…取り合えず、このままだとレミリアちゃん溶けちやいそ うだから持つてくれ」

「溶けちやう？」

「ん、ほら。あれって焼けてない？」

なんか焦げ臭いと思つたら、レミリアちゃんの羽から煙が出てるんだもんなあ。

だから霧を出したのかな？

「ほんとだ、なんか煙出てる」

「お嬢様！ 大丈夫ですか!?」

「『 テレポートアザー』」

「!? い、今何したんだ？」

「ん? 空間転移だよ、魔理沙ちゃんも魔法使いなら使えるでしょ?」

「い、いや… 使えないぜ」

あれ？ 魔法としては初歩の初歩何だけどなあ。

もしかして、初歩すぎてこの世界にはない感じかな？

「まあいいや。それじや、またね。靈夢ちゃん、魔理沙ちゃん」

「あ、ユキ、それに咲夜も、レミリアに宴会開くよう伝えておいて頂戴」

「ん、了解」

さて……と、宴会かあ。楽しくなりそうだなあ。

# ホーム <<紅魔館>> 【異変解決ver2.0】

「それじゃあ、異変解決を祝して乾杯！」

「乾杯!!」

「おお、これが宴会かあ。ジエノパとは違う感じだけどいい雰囲気だねえ。

「あやや、どうも！文文。新聞の射命丸 文です。早速ですが、取材してもいいですかね？」

「私？いいよ、何が聞きたいのかな？」

新聞：、掲示板みたいなものかな。

「ではでは、まずはお名前から」

「ユキだよ、よろしくね」

「ユキさん…と。ところで、その服装から外来人だと思いますがどうして今回の異変に参加を？」

「んー、スペルカードの実験かな」

「実験…ですか」

「うん。ところで、私も質問してもいいかな？」

「どうぞどうぞ！」

「文ちゃんって黒天使？」

さつきからずつと疑問に思つてたんだよね。その綺麗な黒い羽根。  
もし黒天使なら、この世界に風の女神がいることになるんだけど…。

「黒天使…というのはわかりませんが、私は鴉天狗ですよ」

なんだ、鴉天狗か。それなら、妖怪の山にいた種族か。  
それにしては…なかなか強いみたいだけどねえ。

「なんだ、鴉天狗かあ。それじゃあ、天魔とか言つたのと同じ種族？」

「あやや、天魔様をご存知でしたか。ということは、ユキさんが噂になつてた女の子ですか」

「噂？」

私、この世界に来てから何かしたかなあ。まだ、核も終末もしてないんだけどなあ。  
もしかしてカルマのせい？（—100）

「いえ、数日前に妖怪の山に戻つたら、物凄く強い金髪の少女に部下が軽くあしらわれた  
と、友人の白狼天狗から聞きました」

あー、あれね。

「そんなこともあつたねえ。でも、喧嘩を売つてきたのはあつちだよ？」

「いえ、別に責めているわけではなくてですね。ただ、友人が部下が迷惑かけたから謝罪したいと言つてまして」

「気にしなくてもいいのに。ただ、相手の強さは測れたほうがいいとは思つたけどね」

「私だつて、勝てない相手には正面から挑まないもの。まあ、痺れさせて吐かせまくつて殺したことはいつぱいあるけど……」

「んじや、私はもうすこしみんなと話してくるから、また聞きたいことがあつたら聞きに来てね」

「分かりました！・またお伺いさせていただきますね」

「じゃあねー」

\*\*\*\*\*

「あ、ユキお姉ちゃん！」

「ん、そういういえば、フランちゃんは400年以上地上に出てなかつたんだつけ？  
楽しめてるかな？」

「フランちゃん。どう、楽しめてる？」

「うん、楽しいよ！今まで私とお話ししてくれる人なんていなかつたから。

それとね！お友達もできただんだよ！」

「おお、それはよかつた」

「うん。……それでね、ユキお姉ちゃん」

「うん？」

「私、今回の異変頑張ったよ？魔理沙には負けたけど、それでも一生懸命頑張ったよ？」

「えらいえらい」

…あれ、なんでそんなむすつとしてるの？

「…ユキお姉ちゃん。頑張つたらご褒美くれるつて言つた」

あ、ああ！そんなこと言つたような気がする。

うん、確かに言つてたわ。

「…もしかして忘れてたの？」

そ、そんな泣きそうな顔しないでよ、ね？

「わ、忘れてるわけないじやん。何でも言つてごらん、大抵のことはしてあげるから」

「ん、今何でもするつて」

ちよつ、そのネタはダメ！フランちゃんのような女の子が言つていい言葉じやありま

せん！

「えつとね、フラン、ぬいぐるみが欲しいの」

え、何それは…（可愛い）

「ぬいぐるみ？」

「うん。私ね、今までたくさんぬいぐるみをもらつたけど、能力のせいで全部壊しちやつたの。

だから、ぬいぐるみが欲しいな」

「了解。ちょっと待つてね」

そうと決まれば、私が無駄に鍛えた裁縫スキルを見せてあげようじゃないか！

＼材料／

布切れ

革

雪

「ほいっと、お待たせ。じゃじやーん、等身大フランちゃんとレミリアちゃんぐるみ！」

我ながら素晴らしい出来だな、うん！

「わああ！すごい、すごい！ユキお姉ちゃんありがと！」

「どういたしまして。他にも欲しいぬいぐるみがあつたら作つてあげるから言つてね」

「うん！ありがとうね、ユキお姉ちゃん」

喜んでもらえたようでよかつたよ。

裁縫スキルが地雷スキルって言つた奴、ちょっと出てこい。

# 春雪異変 ＜＜☆祝福された』こたつ』＞＞

あれから数か月。

この世界の魔法はすごいね。ストックの概念が存在しないし、一度読んだら永久的に使えるんだもん。

ただ、レベルの概念がないから威力を上げれないのが辛いなあ。まあ、生きた武器ちゃんがあるからいいんだけど……。

というか、私のペットたちは今何してるんだろう。元気にやつてるかな？

「こあちゃん、なんか暇つぶしに面白そうな本持ってきてー」

「面白そうな本ですか？」

「うん。何でもいいからさ、面白そうだと思う本持ってきてくれない？」

「はあ、わかりました」

「ありがと。：咲夜ちゃん！」

「如何されましたか？ユキ様」

う、うーん。前から思つてたけど、様付けで呼ばれるのはなんかむず痒いなあ。

「紅茶のおかわりもらえる？それと、前から言おうと思ってたんだけど、様付けで呼ばな

くていいよ?」

「そうですか? では今後はユキと呼ばせていただきます。紅茶ですね、少々お待ちください」

「にしても、春になつたにも関わらず寒いねえ。パチュリーチャンは寒くないの?」  
「ええ、体の周りに結界を張つているから寒さは感じないわね」

「へえー、そんな使い方もあるんだ」

相変わらず便利だねえ、この世界の魔法は。それとも発想の転換なのかな?

「お待たせしました。それと、お嬢様がお呼びですので、後でお部屋に向かうようお願ひします」

「ん、レミリアちゃんが? 飲み終わつたら向かうつて伝えておいてもらえるかな?」

「畏りました」

お、白黒…。いい加減慣れたけど、いつでも時間を止められるのはいいなあ。

\* \* \* \* \*

「レミリアちゃん、どしたの?」

遊んでほしのかな？」

「ユキ、咲夜と一緒に異変解決に向かいなさい」「異変？」

「ん？ 異変なんて起きてたつけ？」

「そうよ。今回の異変のせいで寒くてたまらないのよ！」

「あー、これ異変だつたんだ」

「異変に決まってるでしょ！ もう5月よ！」

「んー、取り合えず調べてみるよ」

さて、どこから調べようか？

「さてさて咲夜ちゃん、まず何から調べようか？」

「そうね、まずは博麗神社に向かうことにしましょ。既に博麗の巫女も動いてると思いますしね」

「了解、それじゃあ行こうか」

まだ固いなあ。私に敬語なんて使わなくていいのに。

\* \* \* \* \*

「おーい、靈夢ちゃん！……それ、なに？」

「これ？こたつよ。あんたも入る？温かいわよ」

「おー、入る。うわ、すごい温かい」

あ、だめだこれ。もう外出たくないなあ。レミリアちゃんに言つてこたつ用意してもらおうかな。

「おーい靈夢！異変だぜ、異変！」

お、魔理沙ちゃん。相変わらず元気だねえ。

「お、咲夜にユキもいたのか。二人も異変解決に来たのか？」

「そうだよー。ただ、私はこたつに負けちゃつたから、咲夜ちゃんあとよろしく」

「…えつ、ユキあなた何を言つて」

「だつて、外寒いじやん」

「……はあ、しかたない。魔理沙行きましょ」

「お、おお。：ユキはいいのか？」

「大丈夫よ、靈夢と一緒に来るでしょ」

「それもそうか。んじやあな、靈夢。今回の異変の手柄はいただくぜ」

「頑張つてねえ」

さて、私ももう少ししたら動きますかね。

\* \* \* \* \*

「んー、こたつに入りながら食べるシャーベットはおいしいなあ。

あ、靈夢ちゃんも食べる？」

「いただくわ。……美味しいわね、これ。ユキが作ったの？」

「そうだよー。私がバーベキューで作ったの。まだまだあるから遠慮なく言つてね」

「なんでバーベキューでこれが作れるのよ……」

靈夢ちゃん、それは気にしたら負けだよ。

紫ちゃんも疑問に思つてたけど、美味しいから問題ないでしょ！

春雪異変 <<固定A F…だと…>>

「さてと、私はそろそろ行くね。霊夢ちゃんも後から来るんだよ？」

「はいはい。後で行くわよ」

「んじやあね」

それじゃあ、そろそろちやんと働きますかね。

\* \* \* \* \*

「……」

やらかしたあ。私、ここら辺の地形知らないじやん。

“魔法の地図”も何故か発動しなかつたし、どうしたもんかなあ。

「春ですよー！春…なんですよー…」

あれは…妖精？なんか悲しそうだけど、どうしたのかな？

「おーい、どうしたの？なんか悲しそうだけど」

「あ、あなたは？」

「私？ ユキだよ、よろしくね。あなたは？」

「リリーホワイト…」

「リリーちゃんね。何があつたの？」

「もう5月なのに…、春が訪れないんですよ…」

「それね、私もその原因を探つてるんだけど、何か手掛かりとかないかな？」

「手掛かり…、春度、春度が無くなつてゐるの」

「春度？」

「アイテムか何か？」

「そう、春度。これなんだけどね、普通あるはずの春度が無くなつてゐるの…」

「どれどれ…」

「この桜の結晶みたいなのが春度？」

「なら、春度が多いものを探れば犯人見つかるんじや…。」

「リリーちゃん、その春度ちょっと借りてもいい」

「何するの…？」

「…ちょっとね。 物質感知」

「物質感知」

今いる階層の扉、階段、採取スポット、罠があるマスを知る

遠い位置ほど探索成功率は低下

罠の発見は別途探索が必要

これで見つけられなかつたら諦めよ…。咲夜ちゃんに任せればいいよね。

「結果は…　冥界？」

「冥界…？」

「うん、冥界つてところに春度がいっぱいあるらしい。取り合えず、これありがとね」

「うん…」

「それじゃあ、ちょっと待つててね。すぐに解決してきてあげるから」

「頑張つてください…」

さて、ささつと解決しますかね。

\* \* \* \* \*

ここが冥界かあ。というか、階段長すぎでしょ…。まあ、飛んでいくからいいけどさあ…。

「止まれ！侵入者め、ここから先は通さん！」

：あれ、デジャブ。妖怪の山でも似たようなこと言われたなあ。

というか、刀かあ。珍しいね、私のコレクションのために盗ませてもらうよ。速度5桁の私に盗めないものなど、あんまりない！

嘘でしょ、これ……。

★＜＼桜観剣＞／（4d8+8）（2）（—3，2）

太古に妖怪が鍛えた名刀だ

それはスティールで作られている

それは炎では燃えない

それは貴重な品だ

それは武器として扱うことができる（4d8 貫通 10%）

それは攻撃修正に2を加え、ダメージを8増加させる

それはDVを—3上昇させ、PVを2上昇させる

それは不死者に對して強力な威力を発揮する「\*\*\*」  
それは完全貫通攻撃の機會を増やす「\*\*\*\*\*+」

★▽▽白桜剣▽▽ (5d7) (4)

魂魄家に伝わる家宝だ

それはスティールで作られている

それは炎では燃えない

それは貴重な品だ

それは武器として扱うことができる (5d7 貫通 20%)

それは攻撃修正に4を加え、ダメージを0増加させる

それは幽霊に対し強力な威力を発揮する「\*\*\*\*\*+」

それは透明な存在を見ることを可能にする

ま、まじかあ！ 固定 A F !

盗めないのが悔しいけど、この世界にも存在するのか！

これは……、何としても手に入れないと…。

というか、固定 A F を持っているってことは、相当なやり手かな…。

「…剣士として相手してもらおうかな」

久しぶりに私も刀を使おうかな。

★<<飛竜刀>> (6d6+2) (3)

竜に絶大な効果を持つ長剣だ

それはオブシディアンで作られている

それは貴重な品だ

それは武器として扱うことができる (6d6 貫通 20%)

それは攻撃修正に3を加え、ダメージを2増加させる

それは電撃属性の追加ダメージを与える [\*\*\*\*\*]

それは混沌への耐性を授ける 「\*\*」

それは火炎への耐性を授ける 「+」

それは耐久を15上げる

それは竜族に対して強力な威力を発揮する 「++++」

さすがに斬鉄剣はね…。万が一、武器破壊なんてことになつたら死ねるからね。元の世界だつたら気にしなかつたけど、まだこの世界についてよくわかつてないから、念には念を入れておかないと…。

「その構え…。一流の剣士と見た！」

そりやあ、『戦術』と『両手持ち』の技能カンストしてたからね。  
伊達に長年生きてないのよ。

“戦術”

近接攻撃（武器・格闘）と投擲攻撃のダメージ倍率が増大する

“両手持ち”

近接武器を1本だけ持ち、盾を持たないとき、近接攻撃武器の命中率とダメージ倍率  
を増加

これで負けたら、私泣くよ？

「魂魄妖夢、いざ参る！」

「妹、ユキ。叩きのめすよ」

速度200 悪く無いけど私からしたら止まつて見えるよ。

……そう思つてた時期が私にもありました。

まさか速度を変えてくるとはね…。

“人符 現世斬”！」

足運びをずらして、認識している速度を変える剣術。

「…今の、どうやったの？」

見切りが発動してなかつたら、私切られてたかも…。

“見切り”

低い命中力の攻撃を、実際の命中判定より前に「華麗に避けた」で無効にすることができるようになる。

「教えるか！　『剣伎 桜花閃々』！」

剣閃。剣の閃き。一瞬の輝きを持つて描いた軌跡は桜色へと変わり、花弁の弾幕を空に咲かせる。

……本気でやろう。あくまで剣士としてだけれども。

“技能 スウォーム”

隣接対象”全て”に近接攻撃

無数の斬撃が、隣接している花弁を一枚も残さず斬り捨てた。

「そんな馬鹿な……」

「悪いね、これで終わりだよ」

「ごめんね、どれだけ技術を持つっていても速度差には勝てないんだよ。」

全ては速度で決まるからね。

「すみ…ません…。幽々子…様…」

「妖夢ちゃんは頑張ったと思うよ。……そのA<sup>アーティファクト</sup>Fは盗らないであげるよ。私が持つていても、趣味の一環になっちゃうからね」

「……」

また今度、速度の上げ方を教えてあげるよ。……君はいい剣士になると思うよ。  
いや、私が鍛えるのも面白いかな…。

# 春雪異変＜＜廃人 v.s 西行妖＞＞

「あら、お客様？」

「違うよ、異変を解決しに来たんだあ」

あの桜…なるほど、死の宣告かあ。まためんどくさいことを…。

“死の宣告”

終了時に9999ダメージの攻撃を伴う呪い（hex）をかける

まあ、私にとつて9999のダメージなんて今更怖くもないんだけど…。

魔理沙ちゃん達が来る前に何とかしないとまずいかな。

「そう。…ところで妖夢はどうしたの？あの子には門番をするよう言つておいたのだけれど…」

「殺したよ」

「…は？」

「だから、殺したよ？そのうち這い上がつてくるんじやない？」

「何を…言つて…」

「…？」

いや、1回殺しただけなんだけど…。え、もしかしてこの世界だと這い上がつてこれ  
ないの?

街の子供たちだつて、三日もすれば這い上がつてゐるのに…。

「…もしかして、この世界つて死んだら生き返れないの?」

「当たり前：じやない…。何で…、何で殺したのよ!」

「いや、ごめんね?…まさか這い上がつてこれないとは思つてなかつたよ」  
しようがない、復活の魔法を使うか…。

“復活”

死亡したペツト、街の住人を1人復活させる

「…さない」

「ん?」

「許さない…！よくも妖夢を！」

何かキレてるんだけど?死ぬことなんてもう慣れちゃつたから何とも思わないんだ  
よなあ。

「……死ね “華靈 バタフライデイルージョン”！」

空を舞うアゲハ蝶。死者の使い、深く根付いた死の具現化。自機狙いの蝶弾が、まる  
で本物の蝶のように空を舞う。

「悪いけど、速攻で終わらせてもらうよ。魔理沙ちゃんたちに死の宣告が使われたら、洒落にならないからね」

☆祝福された古なる杖 『黄昏の終焉』（1d23）（20） 「15, 0」

“グラビティ” “ナイトメア” “幻影の光線”

“ナイトメア”

神経・幻惑耐性を一時的に低下させる呪い（hex）

“幻影の光線”

幻惑属性の貫通ボルト

「何……これ……う、動けない……あつ……」

悪いけど、少し“混乱”してもらうよ。

“混乱”

ひどい頭痛に襲われ、まともに移動することすらできなくなる。

「私の目的はあの桜だからね。アレはダメだ。這い上がるれないならなおさらね」

「くつ…待て…！」

「待たないよ」

なるほど、西行妖ね…。

“奇跡が起きなければ殺されるだろう”

私の3倍も強いとはね‥。まだこんなものが在つたんだ‥。  
それでも、私には勝てないけどね。

「見せてあげるよ！廃人の生き様、戦い方を！」

“聖なる盾”

一時的に術者のP Vを増加し、恐怖を無効化する祝福

“元素保護”

術者の火炎・冷気・電撃に対する耐性を強化する祝福

“加速”

術者の速度を一時的に増加させる祝福

“英雄”

一時的に術者の筋力と器用を強化し、恐怖と混乱を無効化する祝福

“ホーリーヴエイル”

呪い(h e x)に対する抵抗力を上げる祝福

“契約”

一定確率で致死ダメージを相当量のH P回復に置き換える祝福

☆永遠なる大剣『愛情の星屑』(4d18+30)

それはエーテルで作られている

それは装備している間、エーテル病の進行を早める

それは酸では傷つかない

それは炎では燃えない

それは生きている「LV：100 EXP：0%」

それは武器として扱うことができる（4d18 貫通0%）

それは攻撃修正に0を加え、ダメージを30増加させる

それは速度を5上げる

それは耐久を4下げる

それは使用者の生き血を吸う「\*\*\*\*\*+」

それは地獄属性の追加ダメージを与える「\*\*\*\*\*+」

それは完全貫通攻撃の機会を増やす「\*\*\*\*\*+」

それは魔法の威力を高める「\*\*\*\*\*+」

エーテル

レム・イドの後期に発見された、木々より抽出される新エネルギー。有害な細菌メシエーラを抑制する効果を持ち、私たちメシエーラ菌と共生関係にある種族に死をもたらす毒素。

## エーテル病

具体的には、凶暴化、飲料水への異常な依存、身体部位の増殖や膨大化、脳機能の縮小など、

甚大な被害の多い症状が現れ病状が悪化すれば確実な死が待っている、治療法の確立されていない不治の病。

私がまだ廃人になる前…。盜賊に襲われ、収めるための税金も奪われ、死に続けるせいで資金も底をつき、税金滞納のせいで犯罪者扱いされまともに街に入れなくなつたら頃。

潜つていたネフィアで偶々見つけた生きた武器。数えきれないほどの時間、私の血を吸い続け、時に私を殺し、時に私をエーテル病にし、相手の血すらも吸い続けた魔剣。

……これが負けるとは思えないけどね。

「つと、ほかの装備品も近接特化に変えておかないとね。……それじゃあ、行くよ」

速度5桁

初心者が2桁。熟練の冒険者ですら3桁が限界だろう。しかしその上…。幾多の時間をささげた廃人は4桁に到達する。

素で4桁。その速度は時間すらも置き去りにする。魔法、エンチャント etc.

様々な効果を付けて5桁に到達した物を認識することは、たとえ神であろうと不可能だろう。

「指輪の効果でスタミナは吸収できるんだ…。後は根競べだ！」

\*\*\*\*\*

どれだけの時間がたつただろうか。それは1秒？10秒？それとも1分だろうか。周りからの認識ではその程度だが、彼女にとつてはその数千倍。いや、数万倍の体感時間だろう。

体のいたるところから血を流しつつもそれを気にせず、ただひたすらに枝を切る。……やがて彼女の血で地上が染まつた頃。西行妖はその体から枝を全て失っていた。

「はあ…、はあつ……。これで終わり…だよ…」

彼女は自分の血の海の中で意識を手放した。

# 春雪異変<<異変解決>>

「んつ、ここは…?」

「ユキ、大丈夫ですか?」

「あれ、咲夜ちゃん? 異変はどうなつたの?」

「無事、終わりましたよ。魔理沙と靈夢は先に帰りました」

「そつか。私どれくらい寝てた?」

「二日ですね。今すきま妖怪の式が食事を用意してますよ」

「藍ちゃんか。後でお礼を言つておかないと」

「そうですね。お嬢様からも早く帰つてくるようにと」

「了解」

「やつと起きたみたいね」

「紫ちゃん?」

「気分はいかが?」

「問題ないよ。ところであの桜はどうなつたの?」

「あなたのおかげで異変は解決。西行妖は妖力をほとんど失つたわ」

「それはよかつた」

「何にせよ、魔理沙ちゃんたちが無事でよかつたよ。

そういうえば……」

「ねえ、あの蝶々みたいな人はどうなつたの？」

「……幽々子ね。びっくりしたわよ、突然凄まじい魔力が発生したから何かと思つて見に来たら、血の海で倒れてるあなたを幽々子が殺そうとしてたんですもの」

「うわあお、リジエネレーション発動装備で助かつた」

“リジエネレーション”

術者の自然治癒力を強化する祝福

「……幽々子はあんなことする子じやないわ。一体何があつたの？」

「んー、私が妖夢ちゃんを殺したからかな」

「…………」

「妖夢ちゃんの遺体は？」

「幽々子が預かってるわ。多分今も……」

「そつか、それじやあ早いところ復活させないとね」

「何を言つて……」

「その幽々子ちゃんつて人のところに連れて行つてもらえる？」

「どうなつても知らないわよ……」

「大丈夫、幽々子ちゃんじや私には何もできないから」

「はあ……」

私は廃人だからね。

\* \* \* \* \*

「幽々子、大丈夫？」

「紫……、妖夢が……妖夢……が……」

「そのことで話があるわ。ユキ、入つていいわよ」

「ん、入るよー」

「……何しに来たのよ」

「妖夢ちゃんを復活させようと思つてね」

「……わけないじやない」

「ん、なんて？」

「できるわけないじやない！ 妖夢は死んでるのよ……」

「そりやあ殺したからね。まあ、見ててよ　“復活”」  
 神々しい光が妖夢の体を包み込む。まるでそれは神の慈愛であるかのように、温かく  
 どこか懐かしさを感じるものであつた。

\*\*\*\*\*

「……あれ、私は何をして…」

「うそ……」

「……まさか、死者を生き返らせることができるなんて」

「さすがはユキです」

うん、咲夜ちゃん慣れるの早いね。あと、私じゃなくともできると思うよ？

「おはよう、妖夢ちゃん。いやあ、殺しちやつてごめんね？生き返らせたから許してよ」

「……生き返らせた？私は一体…」

「妖夢！」

「うわあ…!? ゆ、幽々子様？」

「心配したのよ！あなたが、こ、殺されたから…」

「は、はあ…。確かに、私はユキさんに斬られましたね。ただ、その後の記憶が…」「死んでたからね、その間の記憶はないものだよ。私も数えきれないほど経験してきたからね」

今まで何回這い上がったんだろう…。

「それじやあ、レミリアちゃんが呼んでるし私は帰るね。復活は無事に成功したと思うけど、指が一本足りないとか何かあつたらまた言つてね。行こう、咲夜ちゃん」

「ええ、それでは私もここで失礼します」

さて、レミリアちゃんは心配してくれてるかな？

\* \* \* \* \*

「妖夢？…………寝ちゃつたわね」

「…………幽々子、ユキを責めないであげて。あの子はまだこの世界に来たばかりなの。それに、殺してはいけないって説明しなかった私の落ち度でもあるわ」

「…………もういいわ。妖夢も無事に帰ってきたし、私も殺そうとしたもの…。それよりも

……、紫、あの子はいつたい何者なの？」

「私にも分からぬわ。ただ一つ言えることは、私たちが束になつても相手にならないほどの実力の持ち主ということだけよ」

「……じやあ、あの子が幻想郷の敵に回つたら」

「その時は、幻想郷全戦力をぶつけてでも止めるわ」

「……ふふっ、それは頼もしいわね」

「あなたもゆつくり休みなさい。宴会はその後でいいわ」

「宴会は開く前提なのね？」

「当たり前よ、異変は解決されたんだからね」

「……はあい」

はあ、閻魔になんて説明しようかしら。外来人が蘇生させました、じゃ通じないわよね……。

説教長いから嫌いなのよね……。

「ユキ、食事の用意ができる……。紫様、ユキはどちらに？」

あ、藍にユキの食事を用意させてるのを忘れてたわ。

「帰つたわ。咲夜と一緒にね」

「.....」

ごめんなさいね、

藍。

私も忘れてたわ。

# 日常 <<スペルカード万能説>>

「ただいまあ」

「ユキお姉ちゃん！お帰り！」

「うん、ただいまあ」

「遅かつたじやない……なんかいい匂いするわね」

「いい匂い？」

血の匂いかな？さつきいっぱい吸われたしね。

「……なんかユキお姉ちゃん、植物みたいな匂いがする」

「植物??？」

あ……、もしかしてエーテルかな？

「それって、これからも匂いする？」

☆永遠なる大剣 『愛情の星屑』(4d18+30)

「うん！これ！なんか落ち着くようなすごい、いい匂いがする」

「…………なるほどね」

私みたいにメシエーラ菌に汚染されてないから、エーテルが心地よく感じるのか。

私からしたらエーテルとか、ただの害悪なんだけど……。

「…それ、あなたの血を吸つてみたいだけど大丈夫なの?」

「うん、もう慣れた」

「慣れたつて……」

「おー、よしよし、私の血は美味しいかい?お前も相変わらず私の血が好きだねえ。  
……うん、前から思つてたんだけど、君知性あるよね?私の思考に反応して蒼く光つ  
てるし。

嬉しいのはわかつたから、そんなにピカピカしないで。目が痛くなる:。

「ぺろつ……、うえつ、ユキお姉ちゃんの血、物凄くますい……」

「まあ、エーテルがそんなに好きなら当然だよね」

私の体をめぐつてるのは、エーテルの対になるメシェーラだからねえ。

「ほら、口直しにこれでも食べな」

「これは?」

「アピの実パイ」

腐らない、簡単に作れる、そこら辺に落ちてることで昔からお世話になつたね。

この世界にもアピの実はあるのかな?

「んつ、甘酸っぱくて美味しい!」

「それは良かつた。それじゃあ私は部屋に戻つてゐるね」

「食事の時間になつたら咲夜に呼びに行かせるから」

「あ、たぶん図書館にいると思うから、そつちに呼びに来て」

「了解したわ」

ちよつと面白いことに気づいたやつたからね。

\* \* \* \* \*

「それで、話したいことつて？」

「これなんだけどね」

「スペルカード？」

「うん、スペルカード」

「それがどうかしたの？」

「これにさ、魔法を登録しておけることは知つてゐるでしょ？」

「そうね、私のスペルもほとんど魔法だしね」

「思つたんだけど、複数の魔法の同時発動つて出来るのかな？」

もしできるなら、補助魔法を一気にかけられて便利なんだけどなあ。

「……結論から言うとできるわ」

「ほんと!?」

「ええ。ただ、普通に魔法を使うときの倍以上魔力を持つていかれるわよ」

「どうして?」

「さあ、私にも分からないわ。あのすきま妖怪なら何か知っているんじやないかしら?」

「そつか」

まあ、魔力はいっぱいあるからいいよ。

「取り合えず、できるつてことがわかつて良かつたよ。ありがとね」

「どういたしまして」

早速作つてみるかな。

\* \* \* \* \*

……これは、もうスペルカードじゃないな!  
うん、普通にすくつでも使えるものになつちやつたよ。

なんだこれ……さすがは神器クラスというべきかな。紫ちゃん、よくこんなものいつぱい持つてたなあ。普通に万能じやん……

「……それで？ スペルカードはできたの？」

「うん！ ただ、遊びでは使えないようなものも出来ちゃつたけどね」

「そう、良かつたわね」

「ありがとね、パチュリーチayanのおかげだよ！」

「私は何もしていないのだけれど」

「そんなことないよ！ パチュリーチayanがアドバイスくれなければ、『もう一つ』のほうは絶対に作れなかつたよ」

「結局作つたのね」

「もちろん！ 何かあつた時用にね。はい、これ。いらぬかもしれないけどお礼」「卷物？ これは……」

「あ、読まない方がいいよ！」

「どういうこと？」

「それ、読むと魔力が回復する巻物なんだ。いざという時に使ってね」

「魔力が回復するつて……。そうね、ユキだものね」

「うん？ どういう意味かな？」

「何でもないわ。ありがとう、大切にするわ」

「うん、そうしてもらえると嬉しいよ」

### 魔力の巻物

読むと魔力が回復する

「パチュリ一様、ユキ、お食事のご用意ができました」

「私も？」

「はい、一応ご用意しましたが如何なさいますか？」

「そうね、これからは私も頂くわ」

「? ……珍しいですね、どうかしたのですか？」

「ちょっとね。あ、次からでいいから私の食事は果実類にしてもらえるかしら？」

「果実類…ですか？」

「そう、果実類」

「畏りました」

パチュリ一ちゃんに教えといてよかつたよ。何も食べないでも生きていけるからつて食べないのはもつたいないからね。

果実は食べれば食べるほど、“魔力”が上昇するからねえ。  
⋮?: 当然、主能力はカンストしてますとも。だから好きなもの食べるよ。ハーブ漬

け地獄なんか二度とやるもんか：。

ポンコツ信者じやあるまいし。

「そうだ、今度から私も手伝うよ！こう見えて、料理の腕には自信あるんだ！紫ちゃんたちも満足してたしね」

「すきま妖怪が：？ では、次からはユキにも手伝つてもらうことにするわ」

「了解！」

バーベキューセットの力を思い知らせてあげようじゃないか！

# 宴会【弟子ができましたver1.0】

「乾杯！」

「にしても、あんたのおかげで楽できて良かつたわ」

「そう？まあ、今回はいろいろ危なかつたからねえ」

「…ただ、宴会がここで開かれるのには納得いかないけど」

「いいじyan、桜綺麗なんだし」

「片づけるのが面倒なのよ……」

それは確かに面倒くさいなあ。前回の宴会の片づけしてくれた咲夜ちゃんには感謝しておかないとね。

「それはそうと、あんたのお酒、…ウイスキー？だつたからしら、美味しいわねこれ」

「氣に入つてもらえてよかつたよ。まだまだあるから欲しかつたら言つてね」

呪い酒用にストックしてあつたからね。まあ、もう呪い酒とか必要ないんだけど

…。

「あんたの食べるそれ、何？」

「フライドポテト。食べる？いい感じの塩味がお酒に合うよ？」

「もううわ。……これ美味しいわね」

「でしょ！ただ、これはあんまり予備がないから、いっぱいはあげられないけどね」「こんなことならアクリ・テオラでもつと買っておくべきだつたかな。

……靈夢ちゃん、ただの乞食かと思ったけど宴会でお金使つてたのか。  
次からも賽銭？してあげるかな……。

「ユキー！ちよつと来てー！」

紫ちゃん？どうかしたのかな。

「ごめんね、ちよつと呼ばれたから行つてくる」「行つてらっしゃい」

\* \* \* \* \*

「紫ちゃん、どうかしたの？」

「ちよつとね。ほら、幽々子、ユキと話したいことがあつたんでしょ」

「ええ……。ごめんなさいね、あなたのこと殺そうとして」

ああ、なんだそんなことか。

「いいよいいよ。死に慣れてるしね。こっちこそ、妖夢ちゃんのこと殺してごめんね？次からは殺さないように気を付けるよ」

「別にいいわ。ちゃんと生き返させてくれたから。でも、そうね。次からは殺さないで欲しいわね」

「善処するよ」

うつかり殺しちゃった場合は許してね？ちゃんと生き返らせるからさ。ペット用に復活のストックはいっぱいあるんだ。

「ところで、さつきから静かだけど、どうかしたの？ 妖夢ちゃん」

もしかして怖がらせちゃった？ んー、死ぬことに慣れてない人の相手は初めてだからなあ。

「…………ユキさん、私を弟子にしていただけないでしようか？」

「弟子？」

「……妖夢？」

「あなたの剣の腕に見惚れました。どうか、私を鍛えていただけないでしようか」

「…………私としても、妖夢ちゃんのことは鍛えたいなあとは思つてたけど、幽々子ちゃんはいいの？」

「幽々子様……」

「いいわよ？ 妖忌が居なくなつてからあなたの師と呼べる人はいなかつたものね。：この機会に腕を磨いてきなさい」

「ありがとうございます！」

「あ、ただ、私の食事は作つて欲しいわね」

「…幽々子様らしいですね」

「だつて、私料理できなもの。それに、妖夢の料理は美味しいからね」

「分かりました」

「話は終わつたかな？」

「さて、具体的な特訓方法だけど。今から言う選択肢の中から一つ選んでね。

“死ぬまで私に斬られ続ける”

“3食ハーブのみ生活”

“閉鎖空間の中でドラゴン退治”

「どれがいい？」

「……え、剣の腕を磨いていただけるのでは」

「うん、そうだよ？ ただ、それだけだと弱いままだから、ほかの能力も鍛えようと思つてね」

「どうかユキ、あなた閉鎖空間なんて作れたんですの？」

「うん。紫ちゃんのムーンゲートとは違うけど、作れるよ」

「ムーンゲート?……あ、ああ、すきまのことね」

なるほど、ムーンゲートはすきまつて名前なのね。…あ、だからみんなスキマ妖怪つて言つてたのか。

「……一つずつ説明してもらつてもいいですか?」

「一つ目のは、サンドバッグつていう一時的に不死身になれるアイテムを使って、ひたすら私に斬られ続けるの。耐久力とか上がるよ?」

「すみません、さすがにそれは……えっと二つ目は」

「二つ目はそのまんま、食事の時間にハーブしか食べちゃダメ。健康上全く問題ないし、筋力とか色々な能力を上げることができるよ。

「……ただ、ハーブ自体が物凄く不味いけどね」

「そんなに不味いのですか?」

「食べてみる? はい、キュラリア」

キュラリア

食べるだけで全ての主能力に特大の経験値が入るハーブ

「頂きます。……おえつ、…つんぶ」

「吐いてもいいよ?」

「……つん、何ですか…これ…。物凄く苦いです……」

「だよねー。大丈夫、私も数年間食べ続けてきたけど、そのうち何も感じなくなるから。ほら、口直しにこれでも食べな」

リンゴのクレープ

「頂きます。…んつ、あむつ、お…、美味しい…。ぐすつ…、物凄く、美味しいです」「泣くほど?! …まあ、ハーブの後じやしようがないか。幽々子ちゃんと紫ちゃんも食べる?」

「い、いえ…、遠慮しておくわ」

「…頂いてもいいかしら」

「どうぞ?」

「あむつ…、…つん、おえつ…」

あ、逃げた。すきまで逃げた。吐きに行つたのかな?

# 修行 【弟子ができましたver2.0】

「それでえっと、三つ目のは……」

「これもそのまんま、ひたすらドラゴンを倒すだけだよ。……その前に、ちょっと確認したいことがあるんだけど」

「確認したいこと、ですか？」

「うん、ちょっと痛いかもしれないけど我慢してね？」  
“支配”

支配

対象を支配して仲間にする

「さてつと、ステータスは……。あー…、戦術と二刀流は高いけど、回避低いなあ」

「ステータス？」

「ん、気にしないで」

結構いいじゃん、これならすぐに強くなれるかなあ。

「ちょっと失礼」

体力見せてね？

「ふえ？　え……、ちょっと、何を!?」

「はいはい、暴れんなよ：暴れんなよ…」

聴診器

ペツトの体力を表示することができる

「ま、周りに人が！み、みんな見てます！」

「気にしない気にしない」

そんなに恥ずかしいかな？人前で“気持ちいいこと”してるとなんてたくさんいたのに。

\* \* \*

「う…うう…。辱められたあ…」

「おお、意外と体力はあるんだね」

やるかあ、終末狩り。そうと決まれば色々と“準備”しないと…。

「結局、三つ目のドラゴン退治でいいの？」

「……他二つと比べたら、戦うだけですので。いえ、二つ目のも良かつたのですが、強くなつてる実感がわからなくて…。だつたら、戦つて強くなつた方が分かりやすいと思いま

して

「それじやあ明日、準備できたら紅魔館に来てね」「あの、その前に一ついいですか？」

「どしたの？」

「ドラゴンって何ですか？」

「……おつと、もしかしてこの世界にはドラゴンが居ないのかな？」

「幽々子ちゃんもドラゴン知らない？」

「知らないわね。ドラゴン…、何だか可愛いわね」

「……」

かわ…いい…??? お、おう。

「まあ、気にしなくて大丈夫だよ！ちょっと強い妖怪だと思つてもらえれば」

「なるほど…。明日からよろしくお願ひします、師匠！」

師匠！いい響きだねえ。

「うん！それじやあ、また明日！」

さて、明日までに“準備”間に合うかな。

\*\*\*\*\*

「さて、それじゃあやつていいこうか」

「お願いします」

「まずは、ここにある装備全部身に着けてもらつていいかな?」

「ブレス耐性上げないとすぐ死んじやうからねえ。」

「あ、楼観剣じやなくてこつち装備してもらつていい? 白桜剣はそのままいいからさ」

「分かりました! ……と、結構重いですね」

☆ 赤く染まつた短剣 <<深淵の星屑>>

それは全てを終結させる

ラグナロクだと二刀流した時に命中率下がつちやうからね。

「まあ、そのうち慣れるよ。着いてきて」

シエルターがこつちの世界でも使ってよかつたあ。

「ここ…ですか? 見渡す限り何もないようですが…」

「大丈夫、今からいっぱい出てくるから。私が今からモンスター……、えっと妖怪を召喚

するから、その剣で倒してもらえるかな?』

「分かりました!」

……あ、忘れないうちに

『永遠 終わることのない終末体験』』

\*\*\*\*\*

耐久スペルというものを『存じだらうか?

決められた制限時間が過ぎるまで、弾幕を避け続ける必要のあるスペルカードだ。

制限時間は使用者の靈力・魔力・妖力・神力によつて変わる。

そんな耐久スペルとスペルカードの特性を利用して作られたスペルカード。

永遠 終わることのない終末体験

魔法の自動発動機能があるスペルカードに『復活』の魔法を登録し、魔力を限界まで  
注いで制限時間を伸ばし続けたスペル。

自動発動に加え、複数の魔法の同時発動ができるスペルカードに、同一の魔法を登録  
し続けたらどうなるのか……。

答えは、発動条件を満たしたときに自動で同じ魔法を発動するのだ。

これを用いてユキは、対象が死亡した瞬間に“復活”的魔法が掛かる用設定し、その制限時間を、魔力を持って最大限伸ばした。

結果……

制限時間	720時間
登録魔法種類	1種類 “復活”
登録魔法数	254, 350

蘇生させることにのみ特化したスペルカードが出来上がったのであつた。

# 終末【弟子ができましたver3.0】

「それにしても弱いですね。これがドラゴンですか？」

「いや、これは違うよ。大丈夫、もうすぐドラゴンが出てくるから」「そうですか」

「体に異変とかない？今、耐久スペル使ったんだけど」

「耐久スペル！？ いつのまに……。いえ、特に異変はないですよ？」

「それは良かった」

おっと、噂をすれば……。エーテルの匂いがしてきたなあ。

炎上、突如現れた火柱が地面を焼き、天井を焦がし辺り一面にエーテルの風を吹かせる。

数秒後、収まつた火柱から無数のドラゴンや巨人が現れ、シエルター内を埋め尽くした。

「え……、なつ、何ですかこれ！」

「ドラゴン。それじやあ、後は頑張つてね」

「頑張つて…つて、そんな理不尽な!?」

あ、ドレスで溶けた。妖夢ちゃん、死ぬのは何とかしてあげられるけど、痛みはあるからそんなすぐ死んじゃつたら大変だと思うよ?

「1回目だね。耐性防具付けても即死かあ。まあ、1か月は復活の魔法が持続するからしばらく放置しておけばいいかな」

「何のんきに言つてるんですか! 師匠助け……」

「2回目。ドラゴンに食べられちやつたね。死体がなくとも復活はするから安心してよ。んじや、しばらくしたら見に来るから頑張つて」

「無理です! 無理、無理! こんなのは無理ですよ! というか、体中痛いです! ?」

「じゃあね~」

丈夫! そのうち痛みなんて慣れるから。

（3時間後）

お、死亡数500超えたねえ。一旦休憩入れてあげるかな?

「おーい、妖夢ちゃん、生きてる?」

「う……、あ……」

「大丈夫そうだね。一旦休憩だよー。……カオスドラゴン邪魔! グゴアツ!」

さて、一掃しますか。

\* \* \* \* \*

お、正気に戻ったね。まあ、目からハイライト先輩が消えてるけど……。ほつとけば  
そのうち戻るよね!

「はーい、お昼ご飯だよ。食事休憩ぐらいは美味しいもの食べさせてあげるよ!」  
「ひつ…… やだつ、もう……、やだあ……」

「どれどれ、ステータスはつと……」

戦術 25. 00

二刀流 25. 00

回避 40. 00

中装備 60. 00

「妖夢ちゃん、一体も倒さなかつたでしょ？」

「無理ですよっ！ 師匠に分かりますか！ 生き返つたら痛みで動けなくなつて、気づいたら食べられて……、また生き返つたらプレスで焼かれて、生き返つたら巨人に踏みつぶされて、生き返つたらプレスで溶かされ……」

「はいはい、頑張った頑張った。取り合えず、食事しちゃいな。美味しいよ？」「…いただきます。……ぐすつ、美味しい。美味しいです…う」

「おー、泣くほど美味しいかい？ それは良かつた。ゆっくり食べてていいよ」

「はいっ…、うう…美味しい…」

さて、終末の用意してくるかな♪

\* \* \* \* \*

「…」ちそうさまでした」

「お、食べ終わつたね。それじやあ、もう1回行つてこようか」

「ひう……。いやつ……、やだあ…… 無理ですよお……」

「無理？ 私はできたよ。それじやあ行つてこようか！」

「放してえ……！」

「ほら、引き摺つて行つてあげるから頑張つてねー」

「シェルター」

「ひい……ど、ドラゴンがこっち見ていますよお！」

「そりや、見てるでしょ。んじやあ、行つてみようか！」

何を投げる？

あなたは魂魄妖夢を投げた。グリーンドラゴンに見事命中した。グリーンドラゴンは嫌な顔をした。魂魄妖夢は絶望な顔をした。

「またしばらくしたら迎えに来るからねー」

「やだあ…………待つてください……！ 師匠つ…………助けてください……！」

「501回目。あ、安心してよ。あと25万3849回以上死ねるからね♪生き返れないなんてことはないから大丈夫だよ♪じやあねー」

それにもしても、本当なら3時間で4桁以上死んでるはずなのに、まさか500回とはね……。

天才なのかな？筋がいいよ、うん。鍛えがいがあるなあ♪

# 終末【弟子ができましたver4.0】

「うわあ……。あなたも趣味が悪いわね」

「そう言わないでよ。私のいた世界じゃこんなのは普通だつたよ?」

「……どんな魔境よ、あなたの世界は」

「それにしても、パチュリーチyanの水晶玉?は便利だね。まさか遠隔透視ができるとはね」

「どこにでも出来る訳じゃないわよ。距離制限もあるし、魔法で遮られているようなどころには干渉できないわ」

「それでもだよ。おかげで妖夢ちゃんがどうしてるか分かるから助かるよ」

「悪趣味ね。…また死んだわ」

「912回目だね」

「助けてあげないのかしら」

「助けないよ?」

あたりまえじやん。むしろ、食事休憩がある分だけマシだと思うなあ。

本当なら食事もハーブのみにしたいんだけど、それで精神が崩壊したら幽々子ちゃん

に怒られちゃうからね。

「もうすでに崩壊してると思うわよ。目からハイライト消えるるし…、泣きながら戦つての見えてると可愛そうに思えてくるんだけど……」

「今、さりげなく心読んだよね。まだ大丈夫だよ、本当に崩壊したらたぶん動かなくなるから」

「…………そう。咲夜」

「お呼びでしようか」

「紅茶のおかわり頂戴」

「あ、私も」

「畏まりました」

「さつき崩壊したらつて言つたけど、パチュリーチayanこの水晶玉見てて、何か気づくことない?」

「気づくことつて、さつきから半人半靈が死んでることしか……」

「うん、死んでるね。じゃあ死ぬまでにかかる時間は?」

「時間つて……。なるほど……、確かにまだ精神崩壊していないみたいね」「でしょ。……そろそろ回避においては3桁超えるかな」

「? 何か言つたかしら」

「ん、気にしなくて大丈夫だよ」

「ところで、ユキはいつまでこの魔道具を見てるのかしら」

「ずっとだよ。妖夢ちゃんが頑張つてゐるのに、それを見ないわけにはいかないからね」

「……意外ね。優しいところあるじゃない」

「別に優しいわけじゃないよ。……ただ、弟子が成長していくのを見るのが好きなんだだけだよ」

「そう……」

「お待たせしました。紅茶のおかわりをお持ちいたしました」

「ありがと」

「あ、咲夜ちゃん。夜、お肉料理を多めに用意してもらえるかな」

「お肉料理ですか？肉の種類は？」

「何でもいいよ。肉であれば問題ないよ」

「畏りました」

「どうして肉なのかしら。…もしかして私に果実類を勧めたみたいに理由があるの？」

「あるよ？ 肉料理は筋力や耐久が上がるんだ。剣士にお勧めなんだよね」

「にわかには信じがたいわね。……でも、実際微量だけれど、魔力上がつてゐるのよね。果

実類を食べ始めてから…」

「食べ続けることに意味があるからね。何だつたら、一気に上げる食べ物もあるけど食べる? 紫ちゃんにあげたら吐き出しちゃったけど」

「遠慮しておくわ。一気に魔力量が増えて、逆にコントロールに困るわ」

「了解。つと、そろそろ迎えに行つてくるよ。正気に戻るのに時間がかかると思うからね」

「やっぱり精神崩壊してるじゃない」

「あはは♪」

\* \* \* \* \*

「……あれ、ここは…」

「あ、起きた。気分はどう?」

「ひいつ……、し、師匠:」

「もうすぐ咲夜ちゃんの料理ができるからそれまで休憩ね」

「は…、はつ、…い…」

「さて、ステータスは…」

回避 130. 60

中装備 92. 20

回避と中装備がいい感じに育つてきたね。戦術と二刀流は死ななくなつてからかな。  
まあ、本人的には剣の腕も上がつてると思い込んでるだろうけどね……♪

「お待たせしました。お食事のご用意ができました」

「ん、了解」

「今行くわ」

「は…、はい…」

\* \* \* \* \*

「咲夜、今日の食事も美味しいわね」

「咲夜ー、今日も美味しいよ！」

「ありがとうございます、お嬢様、妹様」

「うん、美味しいわね」

「美味しいね、後でこの料理のレシピ教えてほしいなあ」

「ぐすつ……、う…、あむつ……、ぐすつ……」

「妖夢ちゃん、美味しくないの？」

「ひつ……い、いえ…、とても美味しいです…… ぐすつ……」

「「…………」「」

「あ、ありがとうございます。ユキ、レシピについては後で教えますね」「お、ありがとうございます♪」

レシピが増えるのはうれしいねえ。料理スキルがあつても作れるメニューには限りがあつたから助かるなあ。

(ユキお姉ちゃん…)

(どしたの？ フランちゃん)

(えつと…、このお姉さんどうしたの？さつきから泣いてばかりだけど…)

(……きっと咲夜ちゃんの料理が美味しくて感動してたんだよ)

(そつか！咲夜の料理は美味しいもんね！)

(…わあ、純粹)

\* \* \* \* \*

「師匠……も、もう許してください……。無理です、これ以上は……無理ですよ……」「んー?……そうだね。じゃあ条件を付けようか」

「じよ、条件……ですか?」

「終末のドラゴン一体でも倒せたら、1日休みをあげるよ」「え……」

「逆に、1体倒すまで休憩はないから気を付けてね♪」

「ま、待つてください……! 無理……、そんなの……無理ですよお……」

「大丈夫だつて。妖夢ちゃんなら出来るから。それじやあ、行つてみよう♪」

何を投げる?

あなたは魂魄妖夢を投げた。グリーンドラゴンに見事命中した。グリーンドラゴンは嫌な顔をした。魂魄妖夢は絶望な顔をした。

「それじやあ、頑張つてね!」

「やだ……あ。もう……やだあ……」

あはは♪いいじやん、盛り上がつてきたねえ♪

# 終末終了【弟子ができましたver. final】

「そろそろかな。パチュリーチさんはどう思う?」

「今、何回目だつたかしら?」

「8427回目だね」

「…始めてから何日経つたのよ」

「今日で丁度一週間だよ」

「悪魔ね…。それまで休憩を一度も挟まないなんて」

「まあ、死に続けるから餓死する心配もないしね。むしろ、妖夢ちゃんの代わりに幽々子ちゃんに料理を作る方が大変だつたよ」

「…妖夢の状況を説明したの?」

「してないよ?修行に集中したいから代わりを頼まれたつて伝えたから」

「…はあ」

ため息つくと幸運が下がるよ?パチュリーチさん。

（1時間後）

「…あつ、倒した！倒したよ、パチュリーチャン」

「何であなたが一番喜んでるのよ」

「弟子の成長を喜ばない師匠は居ないとと思うよ？」

「弟子の方はあなたのことを師匠じやなくて鬼とでも思つてるんじやない？」

「いやだなあ。私ほど優しい師匠もいないと思うよ？」

「…早く迎えに行つてあげなさい。あなたの弟子、泣きながらぼーっとしてるんだけど

⋮

「ん、行つてくるねー」

約束通り1日休みをあげるかあ……。

\* \* \* \* \*

「お疲れ妖夢ちゃん。約束通り、明日は休みにしようね」

「……あ」

「どうかした？」

「……」

「??？」

「……あ、あつ」

「……落ち着いて。ちゃんと約束は守るからさ」

「し……しよう…、ししよう…、師匠……つ」

「よしよし…。頑張った頑張った。……正直言つて途中で諦めると思つてたよ。けど、

よく頑張ったね……」

「師匠つ……うう……師匠……つ！」

「今はゆっくり休みなさい…」

ほんと、予想以上だよ。まさか死亡回数が5桁いかないなんてね…。  
……ペットにしたくなるじやないか。

\* \* \* \* \*

「……師匠」

「ん? どうかした?」

あれ、妖夢ちゃんまだ居たんだ。せつかくの休みだから遊びに行けばいいのに…。  
「休みって……何をすればいいのでしょうか…」

「……Σ（・□・；）」

…そう来たか。確かに今まで休みなんて与えてなかつたけどさあ…。

「えつ、…えーっと、あ、ご飯まだだつたよね！今から作るからちょっと待つてね！」

「……」

「おーい、ユキー！」

ん？

「あれ、魔理沙ちゃん。どうかしたの？」

「前から言おうと思つてたんだけどさ、ユキつて魔法使いなんだろう？」

「まあ、そうだね」

「だつたらさ、魔法書とかつて持つてないか？」

「持つてるよ？」

「頼む、貸してくれ！」

「どうして？パチュリーチ янに借りれば…」

「それがよお、いつも通り借りに行つたらさ、ユキの方方が珍しい魔法書を持つてるつて  
言つてさあ」

「なるほど…」

う、売りやがった!? パチュリーちゃん、私を身代わりにするとは…。  
……いや、これ使えるかも。

「ねえ、妖夢ちゃん。さつき何をすればいいかわからないって言つてたよね?」

「え、ええ、言いましたけど…」

「じゃあさ、魔理沙ちゃんと弾幕ごっこしてもらつてもいいかな?」

魔理沙ちゃん、妖夢ちゃんに弾幕ごっこで勝てたら私の魔法書、タダであげるよ

「マジか!? いいのか?」

「いいよ? 勝てたらね。妖夢ちゃん、やつてもらつてもいいかな?」

「…わかりました。どうせ暇でしたし、いいですよ」

「へへっ、悪いな、付き合つてもらつて。それじゃあ、スペルカード、残機ともに三つで  
いいか?」

「それでいいです「待つた」:よ」

「おいおい、ユキ。今更待つたはなしだぜ?」

「違う違う。魔理沙ちゃんはそれでいいよ。ただ、妖夢ちゃん」

「……何だろう、嫌な予感が」

「妖夢ちゃんは残機、スペルカードとともに一つね」

「…な、何ですか!?」

「…ユキ。それは私を馬鹿にしているのか? スペルカード1つでどうやつても勝ち目ないじやないか」

「さあ? やつてみないとわからないと思うよ?」

「…ああ、そうかよ。後で後悔するなよ!」

「頑張つてね!」

「し、師匠!」

「行くぜつ! スペルカード!』 魔符 スターダストレヴアリエ!』

降り注ぐ星々。生まれた多数の弾幕は、星となつて墜ちていく。

「…おそい」

「何?」

「なにこれ……。止まつてる?」

そりやあ、終末産ドラゴンたちのブレスと比べたら止まつて見えるでしょうよ!」

あの後、ステータス確認したら、回避の数値が800超えてたしなあ。回避だけなら

カンストまですぐに行けそうだなあ。

「…つ、馬鹿にしやがつて! だつたら! スペルカード!』 恋符 マスター・スパーク

“ !”

束ねられた魔力の本流。本来は肉眼でとらえることができない光の顕在化。顕在化された光が一途に襲い掛かる。

「……っ、ブレスはもう見飽きたんですよ!!」

うわあ、切実。一週間以上、ドラゴンたちのブレス見続けたらこうなるのか…。

「んなつ…!? ありえない…、私のマスパを避けるなんて」

「貰った！」

「はい、そこまで」

……妖夢ちゃん。ちゃんと強くなつて私はうれしいよ。

「魔理沙ちゃんの負けだよ」

「待てよ！私はまだ一回しか斬られてな……い」

「いや、”3回”斬られてるよ。ほら、ちゃんと3回分の跡が残ってるじやん」

「嘘だろ…」

「さてさて、妖夢ちゃん。久しぶりの弾幕ごつこの感想はいかが？」

「……なつてた」

「うん？」

「本当に強くなつてた…。あはつ、あはははつ、私の一週間は無駄じやなかつたんだ！」

「……ぐすつ」

「お、 おう」

怖!? 急に笑い出さないでよ!

「…つて訳で、 ゴメンね魔理沙ちゃん。 妖夢ちゃんに勝てたら魔法書は譲つてあげるよ  
「はあ、 しようがないか。 おい、 半人半靈!」

「…魂魄妖夢です」

「んじや妖夢。 次は私が勝つからな! 覚悟しとけよ!」

「おお、 妖夢ちゃんに勝つとはすゞこことを宣言するねえ。

「…さて、 妖夢ちゃん。 妖夢ちゃんはこれからどうしたい?」

「どうしたいとは?」

「今の弾幕ごつこで分かつたと思うけど、 妖夢ちゃん、 十分強くなつたんだよね。 だから  
さ、 これで修行を終わりにするか、 それともまだ続けるか、 選んでいいよ」

「修行……」

「私は強制はしないからね。 ……それに、 強かつてのはあればあるほどいいつて訳じや  
ないんだよ」

「それってどういう…」

「何でもないよ、 何でも……。 ただ、 強くなりすぎてもいいことがないとだけ言つておく  
よ。 それでどうする?」

「……確かに、弾幕が止まつて見えるぐらいですし、自惚れじゃないんですけど、確かに十分強くなつてゐると思います」

「そうだね」

「でも、魔理沙さんが私に勝つらしいですからね。もつと強くならないといつか負けちゃうかもせんね」

「……」

「……修行自体は今日で辞めにします」

「……そつか」

「幽々子様に一週間以上あつていないですからね。

……でも、その、たまいでいいですでの、あの部屋を貸していただけないでしようか？ 私も、もつと強くなりたいですから…」

「妖夢ちゃん…」

「今までお世話になりました……、師匠」

うん、これぐらいでいいと思うよ。むしろ辞めて正解だよ。そもそも、諦める前提だつたし、『途中で辞める予定』だつたからね。

……私みたいな『犠牲者』は一人もいらないからね。

「またいつでも貸してあげるよ。妖夢ちゃん」

「…ありがとうございます。この装備もお返ししますね」

「うん、今までよく頑張ったね、妖夢ちゃん。…これ卒業祝いにプレゼント」

「これは…？」

「ツインエッジ。身に着けておくと二刀流の腕が上がるネックレスだよ」

★ツインエッジ

それは二刀流の技能を上げる 「\*\*\*」

「ありがとうございます。これ、大事にしますね」

「またいつでもおいで。じゃあね、妖夢ちゃん」

「はい！師匠、お世話になりました！」

「これで良かつたんだよ。強くなりすぎてもいいことないからね。

私の同類が欲しいなんて思っちゃダメなんだよ……。

誰も話しかけてこなくなるし、みんな怯えた目で見てくるし、店主たちには嫌な顔さ  
れるし……。

弱いと生きてすらいけないのに、強くなりすぎても孤独になるんだからさ……。

……ほんと、世界つて残酷だよね。

# 閑話 ＜＜★第1巻目の妖夢の紅炎異変日記＞＞

あれから数日、妖夢ちゃんは楽しくやれてるだろうか…

それにしても、最近暇だなあー、何か面白そうなこと起きないかなあ。

「師匠！遊びに来ましたよ！」

「おー、妖夢ちゃん」

「師匠、顔が死んでますけど何かあつたんですか…？」

「むしろ何も無いから死んでるの…。何か面白そうな」と無いかなあ」

「……でしたら師匠、異変でも起こしてみませんか？」

「えっ、やだ。めんどくさい」

「師匠、異変起こしたらいい事あるかもしませんよ？」

「いいこと？」

「気持ちいいことでもしてくれるの？」

「以前私に言つてたじやないですか」

「うん？」

「私なにか言つたつけ…？」

「あーていふあくと、でしたつけ？貴重な物が世界には転がつて言つてたじやないですか」

「あー、言つてたねそんなこと」

「考えてみてください、異変解決のプロである博麗の巫女や、その補佐的立場の魔理沙さんが、ただの人間なのにどうしてあそこまで強いのか…」

「もしかして…」

「そうです！きっとそのあーていふあくとの力ですよ！」

「な、なんだつてー！」

盲点だった。確かに、靈夢ちゃんとかただの人間なのに紫ちゃんと同じレベルだつたらし…。もしかしたら本当にアーティファクトを持つてるんじや…。

「オーケー、異変起こそう！もしかしたら固定アーティファクトの可能性もあるしね！」

「…チヨロいですね、師匠」

そうと決まれば準備しないとね！

\* \* \* \* \*

チヨロい、チヨロすぎですよ師匠。まさかこうも簡単に動いてくれるとは…、これは私の時代が来ましたね！」

「ところで、異変って具体的に何すればいいの？」

「……」

し、しまつた！ 考えてなかつた！ ど、どうしよう…。異変…。

「あ、あのドラゴンでも放つてみたらどうでしよう！ 手つ取り早く済みますよ！」

「いやいやいや、幻想郷壊れるから！？ 何言つてんの妖夢ちゃん！？」

あれ、おかしいですね。師匠なら幻想郷のことなんて気にしないと思つていたのですが…。

「えつと、一先ず拠点となる場所でも確保したらどうですか？」

活動拠点がないと不便ですからね。

「あ、それは気にしなくていいよ。今から拠点建てるから」

「はい？」

聞き間違いかな、今建てるつて聞こえたんですけど……。

いくら師匠でも流石に1日で建築は…、出来ても掘つ建て小屋ぐらいですかね…。

「ちよつと離れててね。小城の権利書！」

なんということでしょう。あの何も無かつた森の中に、突如として立派な城が建てら

れたではありませんか。

……これ、どうしよう。ま、まあ、その時になつてから考えればいいですよね！

建てたのは師匠だもの！私知らなーい。

「さ、準備しよ？ 妖夢ちゃん」

「そ、そうですね！ 準備しませんと！」

\* \* \* \* \*

「ところでさ、どうして妖夢ちゃんは異変を起こそうとしたの？ 私はアーティファクトが手に入るかもしれないから、異変起こそ予定だけど……」

「わ、私は自分の腕を確かめるためですね！ 魔理沙さんだけだと、どれぐらい強くなつたのか分からなかつたので」

言えるわけないじやないですか！ 博麗の巫女にも勝てそうだつたからなんて……。

「なるほどねえ。さて、異変の内容だけど、景品を用意してここに攻めてきてもらう感じでいいかな？」

「私としては戦えるのならばそれでいいですが、師匠はそれでいいんですか？」

「うん。だって、解決に来るつてことはアーティファクトをもつて来るつてことでしょ？」

「だつたら、カモが現れるまで待ち伏せした方がいいに決まつてるじやん！」  
「うわあ…」

もう師匠の存在そのものが異変なのではないでしょうか…。

「さてと、私はちょっと文ちゃんを連れてくるから、少し待つてね」

「文ちゃん、といふと文屋ですか。一体どうして？」

「だつて、広めないと解決組が来ないじやん。んじゃ、行つてくるね」

「は、はあ…。行つてらっしゃい」

（5分後）

「ただいまー」

「速つ!? お、お帰りなさい」

「え…、速すぎませんかね？ 今さつき出て行つたばかりだと思つたんですけど。  
「あややや、これはいつたいどういう集まりで？ というかこの城なんですか!?」

「文ちゃん。今から私と妖夢ちやんで異変起こすからさ、新聞？ だつけ、それに載せてく

れないかな？」

「はあ、構いませんが……え、異変？」

「そう異変。：：異変だよね？」

「一応、異変になるんじやないですか？ただ、誰も困らないから来るかどうか分かりませんが…」

「そつか…、じやあ嫌でも来るようにするかな」

「え？」

「メテオ」

空中に突然発生した、赤く煌めく岩石の塊。膨大な熱量を持つたソレは、加速しながら降り注ぐ…………とでも、言うと思つたかい？

「な、何やつてるんですか!?」

「落ち着いて、ほら。ちゃんと止めたからさ」

ユキが放つた弾丸が、空に浮かんでいる岩石を止めたのだ。まるで時間が留まつているかのように…。

「さて、文ちゃん。新聞にこう書いてよ。今から三日間以内に、私と妖夢ちゃんを倒せたら報酬として願い事を一つ叶えてあげるつて。

……ただし、誰一人として倒せなかつたらメテオを落として、幻想郷を破壊するつて

さ♪

「ちよつ、聞いてないんですけど!?」

「そりやあそうでしょ。言つてないもん」

「何言つてるんですかああああ!? 私、そこまでするつもりなかつたんですけどお!?」

「あやややや、こ、これは……」

「書いてくれるよね♪ まあ、書かなくてもいいよ? その時は幻想郷が崩壊するけどね♪」

「し、失礼します!」

さ、さすが自称幻想郷最速。速いなあ……って、呑氣にしてる場合じやなかつた!

「どうするんですか師匠!? すぐにみんな来ちゃいますよ!?」

「そうだね。取り合えず、ラムネでも飲んでゆつくりしてよつか」

「なんでそんなに落ち着いてるんですかあ!?」

師匠おおおおお!

# 閑話 ◱��★第2巻目の妖夢の紅炎異変日記

「妖夢ちゃん、一番最初に誰が来ると思う？」

「…やはり博麗の巫女では？幻想郷の危機ですしちゃ…」

「私の予想だと、紫ちゃんかなあ。前にメテオ使わないつて約束しちゃったからね」

「え……」

約束したのに使つてるじゃないですかー！」

「多分もうすぐ…」

「久しづりね、ユキ」

「ほら来た」

「げつ……」

「ほ、本当に来ちゃいましたよ！ どうするんですか！これじやあ異変が…。」

「…ユキ、あなた前に言つたよね？コレは使わないつて」

「うん、だから止めてるじやん」

「そういう問題じやないわよ！こ、これどうなつてるの!?落とさないよね？ねえ？お願  
いだから落とさないでよ!」

「うわあ…」

妖怪の賢者が…、幻想郷の創設者が懇願してるよ……。後で幽々子様に伝えてみよう…。「あら、妖夢。楽しそうなことしてるじゃない」と…

「ゆ、ゆゆゆ、幽々子様!!」

な、なんでこんな所に…。

「妖夢が面白そうなことしてるって新聞に書いてあつたからね。まさか紫のこんな姿が見れるとは思つてなかつたけど…」

「あ、あはは…」

「あ、幽々子ちゃんも異変に参加する？前回は私が相手したから、今回は普通に幻想郷の人たちと戦つてみる？」

「あらいいの？それじゃあ、参加させてもらおうかしら」

「ちょっと幽々子！あなたこっち側でしょ！ユキを説得するの手伝いなさいよ」

「紫、諦めも肝心だと思うの」

「どういうか、本当に落とすつもりはないから大丈夫だよ？私はアーティファクトが欲しいだけだからね。ということで紫ちゃん、アーティファクト頂戴？」

「アーティファクトって何よ…」

「んー……珍しいもの、かな。スペルカードだって私からしたらアーティファクトなん

だよ？」

「珍しいものって言われても…」

「アーティファクトくれなかつたら、このメテオ落としちやおうかなあ。スペルカードのおかげで、連續して発動できるようになつたからいっぽい落とせるね♪」

「……」

「師匠……、あなたは悪魔ですか？」

「やめて！というか、連續して発動できるつてどういうこと!? スペルカードにそんな機能つけた覚えがないんだけど!?」

「そうなの? とりあえず、スペルカードでもいいからさ、アーティファクト欲しいなあ♪。魔法登録しそうで残り数枚しかなくて困つてたんだよね」

「……まあ、スペルカードだつたらいつでも作れるしいいわよ」

「お、ありがと。これで紫ちゃん戦う必要がなくなつたね♪」

「あ、あげてなかつたら?:?」

「もちろん、紫ちゃん<sup>殺してでも奪い取つてたよ</sup>と戦つてたよ」

「た、助かつた……」

「あなた、幻想郷の創設者ですよね…? 師匠に怯えすぎじゃないですかね?」

「つと、來たかな」

「うん?」

「あ、博麗の巫女と魔理沙さん……って、あれ?! 幽々子様が居ない!?

「ちょっとユキー願い事が叶うつてほんとなんでしようね!」

「うん、本當だよ。ただ、數に限りがあるから一人一回までだけね」

願いが叶うつて……、師匠は神様か何かですか?

「こ、これで私もお金持ちに……」

つて、博麗の巫女……、幻想郷の危機だから來たわけじやないんですか……。

「あれ? てつきり幻想郷の危機だから來たと思ったんだけど?」

私もそう思いましたよ。

「知つたこつちやないわ。それよりもお願ひよ!」

「ちよつと靈夢! あなた借りにも博麗の巫女なんだから、幻想郷の為に戦いなさいよ!」

「あら紫いたの。いいじやない別に、私が何のために戦つても。それに、どうせなら幻想郷の為なんかじやなくて、自分の為に戦うわよ!」

「ちよつ、なんかつて何よ!」

……え、あなた本当に博麗の巫女ですか? 少しは幻想郷の心配をしましようよ……。

「妖夢ちゃん、どつち殺る?」

師匠、やるの字が違くありません?

「おい妖夢！お前の相手は私だぜ！今日こそは勝つからな！」

「え、私はどちらかと言うと博麗の巫女が良かつたんですけど」

「なんだと！」

「んじゃ、両方同時に相手したら？私は戦い終わつたあとでも盗めるからね。…それに

幽々子ちゃんも居るからね」「

「賞品として貰うんじやなくて、盗む予定だつたんですね…。というか、幽々子様なら、さつきどこかに行つちやいましたよ？」

「大丈夫だよ、ちやんと居るからね。靈夢ちゃんと魔理沙ちゃん、最初は妖夢ちゃんの相手をしてもらうよ。ラスボスは最後に出るものだからね♪」

「…いいわ。とつとと潰して、願いを叶えてもらうわよ！」

「1人で倒したかつたが、仕方ないか。いくぜ妖夢！今日こそは勝つてみせる！」

「…はあ。やりますか…」

「あ、妖夢ちゃん。これあげるよ」

「？なんですか…これ？」

「モンスターボール。危なくなつたらどこかに投げてみ。すごいことが起こるから」

「あ、ありがとうございます」

「師匠の『すごいこと』は洒落にならないと思うんですけど……」

# 閑話 ◜◝★第3巻目の妖夢の紅炎異変日記◜◝

「残機、スペルともに三つでいいかしら」

「私はそれでいいぜ！前回も”私は” そうだつたからな！」

「ええ、構いませんよ」

「…行くぜ。先手必勝！ この前の借りを返すぜ！ ”彗星 ブレイジングスター”  
！」

自慢のスペルカード、”マスタースパーク”を糧に自速を大幅に上昇させ、対象へと  
突撃する技。

周囲に星型の弾幕をばら撒き、顕在化された光の力で上昇させた速度は、瞬間速度に  
おいて4桁へと突入する。

「確かに速いけど……、一方向からの攻撃なんて簡単に避けられるんですよ！」

シエルターという閉鎖空間内で、あらゆる方向から同時に放たれる複数のブレスを避  
け続けた妖夢にとって、ただ速いだけの一方向からの攻撃を避けることなど、造作もな  
いことだった。

「あら、そう…。だつたら、一方向でなければいいのよね。”靈符 夢想封印”！」

煌めく七色の光弾。妖怪が毛嫌いするという特性を持つソレは、自らの敵を追尾し続け炸裂する。

「追尾!?……なら、まとめて叩き斬る! “断命剣 冥想斬”」

注ぎ込まれた妖力が齎す<sup>もたらす</sup>巨大な光の刃。妖力に包まれた楼観剣があらゆる物を斬り伏せる。

「……驚いた。まさか私のスペルを防ぐとは」

「…フツ。この楼観剣に、斬れぬものなど、あんまり無い!」

「少しはあるのかよ!」

「ふうん…。そこそこ強いみたいね」

「師匠に教えてもらつたんだ…。この世は速度だと。速度さえあれば、誰が相手だろうと負けることは絶対にないつてね! “瞬閃 三光刃”！」

瞬きする暇さえ存在しない刃の閃き。一度の斬撃にて三度閃く刃は、視覚で認識することは神でさえ不可能だ。

……妖夢が必死で造り上げたスペルカード。自分が死ぬまでに相手を斬る…。生き残るために速度だけを求めて続けた剣捌きは、一度の斬撃で三度斬りつけることを可能にした。

「んなつ……!? そのスペルは…?」

「そう…。前に貴方に使つたスペルですよ。これで貴方は終わりです…」

「くそつ…、またこれかよ…」

「何言つてんの？まだ1回被弾しただけでしょうが。何諦めてるのよ」

「違う…。私は3回被弾したんだ…」

「何を言つて、……そういうことね。やつてくれるじやない」

魔理沙の体には、3回分の斬撃痕が残つていた。

「……悪いけど、本気でやらせてもらうわ」

「無駄ですよ。あなた程度の速度では、私の攻撃は避けられない。……あはは、やれる、やれるんだ私は！」

「馬鹿ね、速度だけが全てじゃないわよ」

「はつ、速度が全てなんですよ！速度さえあれば、一方的に攻撃することも可能なんですよ！」

「『夢想天生』」

主に空を飛ぶ程度の能力。飛ぶということは、同時に浮かぶということもある。浮かぶ…、浮く。この世の理から外れ、浮き続ける。自由に…、縛り付けるものなど何もない。全ては彼女の思う儘。

「…嘘。弾幕が、すり抜けた…？」

「私の勝ちよ。あらゆる事象から浮いている私に、弾幕は通用しないわ」「ず……、ずるい！何ですかそれ？反則ですよ！」

「……1回で3回分被弾させるあんたの方が反則だわ。……それじやあ、死のうか」  
この後、持ち前の回避力をフルに使って挑むも、無敵に敵うはずもなく……。

「ひ、卑怯だああああ！」

「勝てばいいのよ、勝てば」

あつさりと倒されてしまうのであつた……。

# 閑話 ◜◝★第4巻目の妖夢の紅炎異変日記◜◝

「あー、負けちゃつたかあ」

「う…。すみません、師匠」

勝てると思ったんですけどね…。はあ、まだ博麗の巫女には勝てないかあ…。  
「ん、私はすでに目的達成してるからいいんだけどね。ところで、どうしてモンスター  
ボールを使わなかつたの?」

…あ、忘れてた。

「すみません、忘れてました。…結局これ何だつたんですか?」

「どこかに投げてみ?」

「……えいつ。…うん? 特に何も…」

「妖夢く、見てたわよ? 成長したじやない」

「ゆ、幽々子様!? 今までどちらに…」

「あなたの持つてたモンスターボールの中よ」

「ええ……」

ど、どうやつて入つたんですか!…。師匠の道具は相変わらずめちゃくちゃですね

…。

「ところで師匠、目的達成したとは…？」

「うん？ああ、妖夢ちゃんの戦闘中に盗ませてもらつたからね。ここじゃ聞かれるかも  
しないし、詳しくは後で話すよ……」

「い、いつの間に…」

全く気づけなかつた……。

「さて、次はユキの番よ！準備はいいかしら？」

「うん？別に戦わなくとも…」

「ユキ、ちょっとといいかしら」

「紫ちゃん？どうしたの？」

(靈夢の願いを叶えるを阻止してもらえないかしら)

(それまたどうして？)

(…ないと思うけど、それで博麗の巫女を辞めるとか言われたらたまつたもんじやない  
からよ……)

(あー。…たしかに、お金に困らなくなつたら何もしなくなる可能性はあるかもね。  
…実際そういう知り合いがいるし)

(本気出していいから、靈夢の願いだけは阻止してちょうだい)

(…いいの？ 私に勝てなかつたらメテオ落とすかもしないよ？)

(その時は私が全力で相手させてもらうわ)

(おお、怖い怖い。紫ちゃんとは本氣で戦いたくないねえ。……まあ、私の目的は達成してるからいいけどさ)

(それじゃあ、お願ひね)

(あいあい)

「ちよつと、何話してるのよ？」

「ん、何でもないよ。それじゃあやるけど……、ごめんね？ 紫ちゃんに頼まれちゃつたから本気で相手させてもらうよ？」

「別に構わないわ。そもそも私も本気でやるつもりだつたから」「それは良かつた。それじゃあ、残機とスペルカード枚数だけど私が決めてもいいかな？」

「いいわよ。前回は私が決めたからね」

「ん、それじゃあ残機は一つ。スペルカードは『無限』で」

「分かったわ、じやあそれ…………はあ？」

「じやあ、始めるよ？」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ！ 何よ無限って…」

「はい、捕まえた」

さすがに速度4桁は視認出来ないよねえ。……もし視認できたら當時バフ積む可能性が出て来ちやうから出来ないでほしいんだけど…。

「……つ、だつたら！ 夢想天……「悪いけど私の勝ちだよ」生……」  
いくら無敵でも発動前に『吊るされたら』どうしようもないよね？

サンドバッグ

縄を解くまで、動くことも死ぬこともできない万能アイテム。  
ノイエルで回収しまくつたからね♪在庫はいっぱいあるのよ。

「ちよつと！ 何よこれ！ 解きなさいよ！」

「ほう、白かあ。レミリアちゃんとは違つて意外と大人っぽいじやん」「ひ、人の下着を見るんじゃないわよ！」

「どうか、スペルカードは無限なんだから自分で解いてみたら？ 私はまだ、『攻撃』してないから勝負は続いてるよ～？」

「……ないのよ」

「うん～？ どうしたの～？」

「使えないのよ～・さつきから解こうとしてるけど、指先一つ動かないじやない！」

「そりやあ、そういう物だもの。今の靈夢ちゃんにできることは何もないよ♪」

というか自分で解けたら困るんだけどね？もしそんなことができたら、私のバブル工場が崩壊してるよ???